
冬子と密輸団

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬子と密輸団

【Nコード】

N1387D

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

旅というものは、突然いろいろと思いがけない展開を見せるものだ。それが旅のおもしろさでもあるのだろうが、ロンドンに着いてそうそう人を殺すことになるとは、私自身まったく予想もしていなかった。

部屋へ呼ばれたときから嫌な予感がしていたのだが、行ってみるとその通りだった。加奈はいつものように私をなじり始めたのだ。それが彼女の趣味だったのだ。

なじる理由など何でもよかった。このときは、劇場で私の態度が悪かったと加奈は言った。

私はちかってそんな態度は取らなかったといえるが、真実など加奈にはどうでもよかったのだ。私たちは二階席にいたのだが、一階にいた数人の見知らぬ若い男たちが私に向かって手を振ったことを持ち出し、私が色目を使ったからだとか加奈はせめ立てた。

もちろん言いがかりに過ぎない。そんな男たちのことなど、私は手を振られるまで気がつかなかったのだ。

こうやって加奈からなじられるのは、いつものことだった。「おまえは青野家にはふさわしくない」だの「おまえは青野家の名を汚そうとしている」などと言われるのが常だったのだ。

私がこの世に二人とおらぬような品行方正な娘だったとしても、加奈は何かしら欠点を見つけ出してせめ立てたに違いない。そして最後は「お情けで面倒を見てもらっている身のくせに」と言い、私が泣き出すように仕向け、それからやっと解放するのだ。

だがあの夜は違っていた。私は、涙を流して加奈の許しをこうようなことはしなかった。誰にだって、我慢の限界というものがある。

あの部屋には、金属製のキューピッド像が飾られていた。つかみやすい手ごろな大きさではあった。私はそれを両手でつかみ、振り上げ、加奈の頭の上に振り下ろしたのだ。中身のつまった重いものだから、一撃で十分だった。加奈は声も上げなかった。私の突然の行動に驚き、恐怖の表情を浮かべたままで倒れた。あの女は、天使の像に頭を割られて死んだのだ。

ドアが開く音が聞こえたので振り返ると、物音を聞きつけてやってきたのだろう。佐藤と目が合った。死体を見て驚いた顔をしていたが、やがて言った。

「お嬢様、ご心配なく。私によい考えがございます」

翌々日、私は一人でロンドンの町に出た。『ハチの巣通り』は、小さな家をごみごみと立て込んだあたりにあった。馬車が止まったので、私は降りて、御者ぎよしゃに金を払った。御者は私をじろりと見つめ返したが、チップを多めに渡すと「ありがとうございます、お嬢さん」と言った。

歩道に立ってまわりを眺めたが、急に心細くなってきた。すぐにここを離れたい気持ちになったが、もう馬車は遠くへ行ってしまう、角を曲がって見えなくなるところだった。

薄汚れた小さな家々がくっつきあって立っている。道幅はとても狭く、石畳いしだたみはゆるんで、あちこちでめくれかかっている。下水口からは、嫌な匂いのする空気が立ち上ってくる。のぞき込むと、ドブネズミがさつと姿を隠すのが見えた。

路地の曲がり角には住人たちがいて、みんな私を見ていた。歓迎

している目つきには見えなかった。突然びしやりと音がしたので振り返ると、すぐそばの窓を誰かが閉めたところだった。

目的の家は目の前にあって、振り返って見上げて、私はさらに絶望的な気分になった。この街の雰囲気にはびつたりとマッチした家だ。安っぽい二階建てで、もとは白かったらしいが、今は真つ黒に汚れている。ペンキのはげたドアがあり、そのわきに番地が書いてある。

私はため息をついた。やはりここに違いない。そつとドアをノックしたが、何の反応もなかった。一分待っても何も起きなかった。留守だと思い、私はうれしくなった。早くホテルへ帰ろう。ここへ来た目的ははたせないが、私の知ったことではないという気になっていた。

突然、ドアが開いた。予告も何もなく、足音も聞こえなかったのだ、私はひどく驚いた。ドアを半開きにして、やせた背の高い女が顔を出していた。丸くゆった髪をしているが、半分以上は白髪で、あちこちほつれたりおくれ毛があったりする。着ているものも、貴婦人のような言いがたい。エプロンには茶色い大きなしみがある。

私を見下ろし、女は口を開いた。ケンカをするときのメンドリのような声を出した。

「ああ？」

「あとう、探偵のロングさんに……」

私が言い終わる前に、女はまた口を開いた。

「あのごくつぶしの部屋は屋根裏だよ。案内なんかしないからね。行きたきゃ勝手に上がってくれ」

「えっ？」

「ほれ」

女はドアを大きく開いて、入れと私に合図をした。

そのあと、私がどんな思いを味わったか想像がつくだろうか。玄関からはすぐに階段が伸びていたが、狭くてきつくて汚れていて、足の下でギーギーと鳴って、とてもじゃないが楽しくなかった。だがこの階段も、屋根裏部屋に比べればはるかにましだったのだ。

私は階段を二つ上がって、屋根裏部屋の入口の前に立った。クモの巣が張って、ホコリが積もって真っ白になった窓から、ぼんやりと光が差し込んでいる。ドアは開いたままだった。だから何も考えずに一步踏み込んだのだが、次の瞬間にはもう後悔していた。

これが名探偵の住む部屋であるものか。机もイスもベッドの上も物だらけだ。脱いだままの服。くしゃくしゃの新聞。吸ガラでいっぱい^{いっぱい}の灰皿。

それだけではない。名探偵というのは、シャーロック・ホームズのようにかっこいい人のことだ。髪の毛はくしゃくしゃ、シャツもしわだらけ、ズボンつりの片方がずり落ちたままでも気がつかないまぬけ面^{まぬけ}のことではない。私の足音に驚いて、けとばされた犬のような顔で振り返ったりはしない。

「おまえ誰だ？」 ロンドンで一番の名探偵（ホテルの支配人はそう言った）、ジョン・ロングが私を見ていた。

「事件の依頼人です」

「依頼人？ 何の事件だ？ ああ、オレに解決しろって言うんだな。おまえの名前は？」

「冬子といいます」

ロングは露骨に嫌そうな顔をした。「外国の名前は覚えにくくていけねえや。イギリスへ来るときには、メアリーとかジェーンとか適当に改名しておいてほしいな」

「よけいなお世話ですよ」

「そうかい？ まあいいや、おまえの名前はフィッシュとかいったな？」

「冬子です」

「それでフィッシュ、何の用だって？」

私はため息をついた。

「ちよつと困ったことが起きて、ホテルの支配人に相談したら、ロングさんを推薦^{すいせん}してくれたんです」

「そりゃびつくりだ。どこのホテルだ？」

「北風ホテルです」

「おまえは金持ちだな」ロングは大げさに驚いた顔をした。「あそこの宿賃はくそ高いからな」

私は、この日何回目かのため息をついた。

「まあ座れや」ロングは、そばのイスを指さした。自分はベッドに腰かけた。

私はそのイスを眺めた。大きな皿が置いてあり、何日前のものか知らないが、ひからびたフライドチキンが乗っかっている。その皿をどけないと座れないが、私は手も触れなくなかった。

「じゃあ立ってろ」ロングの声が聞こえたので、私はほっとした。だが続いて、ロングはまくし立てた。「どんな事件なんだ？ 早く話せ」

「加奈が行方不明になってしまったんです」

「おまえがフィッシュで、今度はカナリアか？ 次の登場人物はブルドッグってんだろ？」

「加奈は日本人で、姓は青野といいます。青野家というのは、有名な大金持ちの一族です。いろいろ見聞を広めるといふ目的で、この加奈がヨーロッパ旅行に出て、その途中でロンドンに立ち寄ったというわけです」

「金持ちは違うよなあ」

「佐藤というメイドも一人ついてきています」

「日本の醸造酒は、なんていうんだった？ そんな名前じゃなかったか」

「私は通訳です」

ロングは大きさに首を振った。「おまえのしゃべり方は、昨日オレのサイフをすったガキとそっくりだ。あれはおまえだったんじゃないのか？」

「一昨日の夜までは加奈は元気でした。芝居を見にいった、ホテルに帰ってきたのは九時ごろでした。そのままお休みを言って別れたんです。私は自分の部屋へ寝にいき、加奈は佐藤と一緒に寝室へ行きました」

「その醸造酒と同じ名前のメイドは何と言ってるんだ？ 酒くさい息の女か？」

「日本の醸造酒はサケです。佐藤に着替えを手伝わせ、加奈は一人で寝室へ入っていったそうです。佐藤は、夜中に物音を聞いたりはしなかったそうです。朝になっても起きてこないので見にいったら加奈のベッドは空っぽでした。すぐにホテル中を搜したんですが、どこにもいない。ホテルの人たちも、加奈が出ていくところは見かけなかったということでした」

「警察へは届けたのか？」

「^{ねが}すぐに届けました。ところが、^{しっそう}失踪後四十八時間たないと^{そうさく}捜索願いは受理できないとかで」

「警察が出てきたって、何の役にも立ちやせんがな。それでも結局は受理させたんだろう？」

「なぜわかります？」

「おまえの得意そうな顔にそう書いてあらあ」ロングはにんまり笑った。「どうやって受理させた？」

「大使館から手を回してもらいました。青野という名前が、ここで役に立ちました。警察はすぐに刑事をよこしてくれました」

「やっぱり金持ちは違うねえ」

私はうんざりして、フライドチキンの皿を投げつけてやるうかと思ったが、その前にまたロングが口を開いた。

「来たのは何という刑事だ？」

「ゴールド警部です。でも、あんまりあてになるようには見えませんでした」

「はっはっは」ロングが笑いだした。「ゴールドか」

「知ってるんですか？」

「よく知ってるさ。打ち上げ花火みたいにまつすぐ突き進むしか能のない男さ。そのうち火が消えて、失速してひよるひよる落ちてくる」ロングは笑い続けた。

「それからどうした？」笑って暑くなったのか、ロングはシャツのボタンを一つゆるめた。

「ゴールド警部がどうも信用できない感じだったので、私立探偵を雇うことになって、ここに来ました」

「なるほど」ロングは少し考え込んだ。「カナリアは、ロンドンには知り合いがいるか？」

「いないと思います」

階段を上がってくる足音が、背後から聞こえてきた。すぐにその人物が姿を見せた。ゴールド警部だ。

「やっぱりここにおられましたな。ホテルで聞いてきたんです」ゴールドは、私の顔を見て言った。ロングのほうを向き、帽子に手を当てて、あいさつするしぐさをした。「こんにちは、ロング大尉」

「ああゴールドの旦那。行方不明の日本の姉ちゃんについて、何かわかったんですかい？」

ゴールドの表情が少し変わった。「大変お気の毒ですが、遺体が発見されたようです」

「え？」と私。ロングも口を開けたまま、目を大きく見開いている。ゴールドが続けた。

「遺体が検視局へ運ばれてくるのは夕方ごろの予定です。確認はそれからということになりますが、たぶん間違いないでしょう。年齢や人相、服装などが一致しますから」

「もう殺されちゃったのか？　どこで発見されたんで？」とロング。

ゴールドはちょっと笑った。「ロンドン南部のシルバーという家ですよ、ロング大尉。それがちょっとおもしろいですがね」

「どうおもしろいんです？」ロングは一瞬不審そうな顔をしたが、すぐにニヤニヤ笑い始めた。きつと何か猥褻な^{わいせつ}ことでも想像したの

だろう。

「その家は今、建物を改装工事中でしてね。部屋の飾り物として、ある店から等身大の石膏像を購入したんです。二メートル近くある大きなものなんですが、少女が水ガメをかついだポーズの像でして、大きな木箱に入れられて、今朝その家に届いたんです」

「その中に死体でも入ってたんですかい？」

「ええ、家人が梱包をほどいたんですがね。その驚きようつたらなかったそうです」ゴールドは、いかにもおかしそくに笑った。

「梱包してあった？」

「分厚いしっかりした木箱で、外から見ておかしなところはなかったそうですよ」

「その死体は、本当にその日本人に間違いはないんですかい？」

「正式の報告はまだですが、まず間違いないでしょうな」

「やれやれ」ロングは頭をかかえた。

私は一瞬、加奈の死をいたんでくれているのかと思ったのだが、すぐにロングがつぶやくのが聞こえた。

「これで金は入らなくなった」

私はあきれて、このひげ面男を眺めていたのだが、すぐに思いつき、口を開こうとした。

「あのう……」

「なんだ？」ロングが顔を上げて、じろりと私を見た。

「これって殺人事件なんですよね？」

「それは間違いないと思います」ゴールドが答えた。「遺体の頭部には鈍器でなぐられた大きなキズがあるそうですから」

「じゃあ、やっぱりロングさんをお願いしないと」

「それは、オレに捜査を依頼したいということかい？」ロングはぴよんと立ち上がった。「警察が捜査するはずだぜ？」

「いや、でも……」この先どう言ったものか、私は少し考えた。だが考え続ける必要はなかった。こわれたダムのように、突然ロングは大きな声で話し始めたのだ。

「ぜひやらせてくれ。昨日サイフをすられちまって、一文無こちやんなしなんだ。貧民救済、立派な人助けた。いやあ、すてきなお嬢さんだねえ。大きな瞳がパツチリとして、実にチャーミングじゃないか。ねえ、ゴールドの旦那」

五分後には私とロングは家を出て、表の通りを歩いていた。ゴールドの姿が角を曲がって見えなくなり、ロングと二人きりになって、すぐに私は言った。

「ゴールド警部は、なぜロングさんのことを大尉って呼んだんですか？」

「なぜっておまえ、オレは本当に大尉だからさ」

「本当に？」

「オヤジが海軍にいてな、兄貴も海軍軍人だ。そのオヤジが、オレもむりやり海軍に押し込みやがった。すぐに退役してやったが、それでも一応は正式な大尉殿さ」

「へえ」

「感心するようなことじゃねえよ。一インチも泳げない海軍大尉だぞ」

ロングは太っていて、背が高く身体はがっしりしていた。屋根裏部屋で見たときにはしまらない感じだったが、こうやって上着を着て帽子をかぶると、少しはさっそうとして見えた。ヒゲ面が海賊船の船長を思わせなくてもないが、ごついブーツをはいて、どすんどすんと歩く。

「まずメシを食って、それから仕事にかかろうや」歩きながらロングが言った。

少し歩いたところに小さな食堂があった。『ハチの巣通り』にふさわしい、しみったれた店だ。天井は低く、窓も小さく薄暗い。テーブルは数えるほどしかない。ロングは私を連れてそこに入り、テーブルの前にどかりと座った。

ロングは本当によく食べた。私はコーヒーを飲んだだけだったが、この大男は、三十センチもあるパン二本とスープ三杯、焼いたベーコンを山盛り平らげた。最後に大きな音を立ててゲップをした。

「そんなに食べて、大丈夫なんですか？」テーブルの前から立ち上がりながら、私は言った。

「大丈夫さ。オレの胃は人一倍、丈夫なんだ」

「そうじゃなくて、お金あるんですか？ スリにあっただんでしょ？」

ロングも立ち上がり、平気な顔で私を見下ろした。「おまえが払うんだ。必要経費だろ？」

「自分で飲んだコーヒー代は払います」

「けちけちするな。自分の金でもないくせに」

もう何を言っても仕方がないような気がしたので、私はポケットからサイフを引っ張り出した。

通りに出て、馬車を拾った。この時代のロンドンには、金を取って客を乗せる辻馬車は何千台も走っていて、現代のタクシーと同じように気軽に利用することができた。その辻馬車にロングが乗り込むとき、大きな身体のせいで、ひっくり返ってしまうのではないかと思えるぐらい車体が傾いた。「おっと」と御者がつぶやく声が聞こえた。

北風ホテルにはすぐに着いた。馬車を降りてロングがさっさと歩いていくので、私は半分駆け足のようにして、急いで歩かなくてはならなかった。ロングが正面玄関ではなく、裏口をめざして歩いていることに気がついた。建物のわきを抜け、花壇の隣を歩き、塀にそって進んだ。

「どこへ行くんです？」息をつきながら、私は言った。「そつちは裏口ですよ。メイドの佐藤に会うんじゃないんですか？」

「何のために？」

「えっ？」

「いいから黙ってついてこい」

私たちはホテルの裏手に出たが、正面とは違って、ここはかなりみずばらしかった。古びたレンガ塀に囲まれていて、花壇などもなく、すみには雑草が生えている。ぬかるんだ地面には、よく見るとタバコの吸ガラが散らばっている。荷物を積んで出入りしたらしい馬車のわだちがいくつも残っている。

ロングは私の前を歩き続けた。やがて小さなドアに行きあたった。木でできた安っぽいもので、もちろんここも宿泊客たちの目に触れる場所ではない。ロングは気軽にそのドアを開け、中へ入っていった。私は少しためらったが、ロングが振り返って「こいよ」というので、ついていった。

ドアを入ると、すぐに急な下りの階段になっていた。幅の狭い真つ暗なものだ。天井を見上げたが、もちろん明かりなどはなかった。足を踏みはずさないように注意しながら、私はロングの後をついていった。再びドアがあり、ロングがそれを開けると地下室のような場所に出たが、空気がむっと暑いことに気がついた。

「やはりここにあったな」とロングがつぶやくのが聞こえた。

前を向くと、鉄製の筒のようなものが目に入った。巨大な水タン

クを横倒しにしたような形で、分厚い板を組み上げて作ってある。すぐにボイラーだと気がついた。ホテルの部屋に暖房用の蒸気を送るための機械だ。この暑さは、その内部で燃えている石炭のせいだろう。私は帽子を脱ぎ、マフラーをはずした。

ロングはボイラーの前にかがみ、仕組みを調べているようだった。

足元の床には、スコップからこぼれた石炭が散らばっている。鉄でできたハッチのようなものがあり、そこから石炭を中へくべるようになっていいる。ハッチの大きさは、手足をまっすぐに伸ばせば私でも何とか通り抜けることができそうなくらいだ。

「心持ち狭いが、仕方ねえな。あの女も、ここまで来たことはなからう」とロングがつぶやくのが耳に入った。

「何の女のことなんです？」私は言った。

ロングは振り返り、歯を見せてにっと笑った。
「なんでもねえよ」

階段を降りてくる足音がし、ドアが開く音が聞こえたので振り返ると、背後のドアが開いて、女が一人入ってきたところだった。女もすぐに私とロングに気づき、驚いた顔をした。

年は二十歳ぐらいで、制服を着ていたから、このホテルの従業員に違いなかった。階段を降りながら火をつけたのか、手の中にタバコを持っている。私とロングを見つめ返し、かすかに笑って、口から煙をはき出した。

「見かけない顔ね。こんなところで何をしてるの？」

髪を整え、レースの髪飾りを乗せ、上品に化粧をしていたが、言葉づかいはあまりマツチしてはいなかった。もっと派手な口紅を引き、目の上にクレオパトラのような濃いシャドーを塗ったほうがよっぽど似合いそうな感じた。だがこの女も、私がここの宿泊客だとは気がついていないようだった。

「いよう、べっぴんさん」ロングはにんまり笑った。

「何よ。変な男ね」と女は言ったが、それでもうれしそうに笑っている。私は黙って見ていることにした。

「調子はどうだい？」自分もタバコを取り出してくわえながら、ロングが言った。

「まあまあつてとこね。あんたたちは何者？」女はタバコを突き出し、ロングのそばへ持って行ってやった。ロングは顔を近づけ、自分のタバコに火を移し取った。

「おたくの支配人から、ボイラーの様子を見てくれといわれた。最近調子が悪いんだって？」

「そうなの？ 聞いてないわよ」女は不思議そうな顔をして、指でトントンとたたいて、タバコの灰を床に落とした。

「ならいいんだ。支配人の勘違いかもしれねえ」ロングは笑った。
「おおそうだ。ついでだから教えてくれよ」

「何さ？」

「昨日の朝だったか、大きな木箱を積んだ馬車がこのホテルから出

ていったらどう？ 棺おけぐらいの大きさの箱でさ」

「それがあんたと何の関係があるの？」女はタバコを口から離し、天井に向けて、煙をふうつとはき出した。

「どうもこうもねえよ」ロングの声の調子が変わった。「オレはすぐその道を歩いてたんだ。そうしたらその馬車が出てきて、泥水をはねかけやがった。見てくれ。教会へ行くとき用の最高のズボンが台無しだぜ。今日こそは神父様のところへ百ポンドばかり寄付しに行こうと思ってたのが、あきらめるほかねえな」

いかにも残念そうな顔をして、ロングはしわだらけのズボンを指さした。噴き出すようにして、女はぶつと笑い始めた。

「それは気の毒ね。でもその馬車のことを調べて、どうしようつての？」

「御者を同じ目にあわせてやるのさ。首根っこをつかんで、チームズ川の泥の中でたと遊ばせてやる」

「まあお好きに」女は笑い続けた。「どこの馬車屋かは知らないわ。張替えをするために、古い長イスを家具屋へ送り返したのよ。駅へ持っていったのだと思うわ。支配人が知っているはずよ。きいてみたら？」

「ああ、恩にきるぜ」

タバコを吸い終えて、女は吸ガラをボイラーの中にぽんと放り込んだ。だがすぐにロングはポケットからもう一本取り出し、女の前に差し出した。

「まあ、もう一本どうだい？」

「あら？」意外そうにまゆを上げて、女はロングを見つめ返したが、タバコは受け取った。「何か下心がありそうね」

女が口にくわえたので、今度はロングが火を移し取らせてやった。

「オレは今、ちょっとやばい立場におかれちゃってな」ロングは意味ありげに笑い、声をひそめた。

「何なの？」

「あの小娘のことさ」ロングは私を振り返り、タバコを持った手で軽く指さした。

「あの女の子？」

「ああ」いかにも重大な秘密だともいうように、ロングは女の耳に顔を近づけた。「あの東洋人の男たちは、もうチェックアウトしたかい？」

「東洋人？ 宿泊してたお客のこと？」

「そうさ。二人か三人いたと思うんだが」

「なぜ知ってるの？ あの二人は昨日の朝早く、緊急の仕事ができたとかでバタバタとあわただしく出発していったわ。部屋代は三週間分前払いしてあったから、清算が大変だったみたいよ」

「それは確かかい？」

「間違えつこない。辻馬車を呼んであげたらチップをはずんでくれたから、よく覚えているわ」

「どこの国の人間だと言ってた？」

「さあ」女は困ったような顔をした。「お客の詮索せんさくをするのは私の仕事じゃないしね。だけどあの客とその女の子と、どう関係があるの？」

女に見つめられても、ロングは表情も変えなかった。
「秘密を守るかい？」

「ええ、もちろん」タバコを持ったまま、女は軽く右手を上げてみせた。

「この娘は、いかにも頼りないまぬけ面をしているが、実はさる国王の血を引く跡継ぎなんだ」

「まぬけ？」女は首をすくめ、私を盗み見た。

「気にすることはない。こいつは英語はまるつきりわからねえ。それが血みどろの跡継ぎ争いに巻き込まれちまって、命からがらロンドンまで逃げてきたというわけさ。だが敵もさるもの、ここまで刺客かくを送り込んできたというわけだな」

「あの二人が刺客なの？」女は目を丸くした。

「ああ、だが姿を消したということだな。まあいい。オレはこの娘を連れて、しばらく田舎にでも身を隠すさ」

「そのほうがいいわ」女は再び、ちらりと私を見た。「若いのに気の毒ね」

「そう心配することもないさ」ロングは気軽に続けた。「とにかくありがたいよ。いろいろ教えてくれて」

「ええ。あんたもその子には気をつけてやってね」

女はタバコを吸い終え、上の階へ戻っていった。

北風ホテルを出て、再びロングと一緒に辻馬車に乗って、駅へ行くことになった。駅はホテルから数分のところにある。

だが町の通りをいくらも進んでいないところで、ロングは不意に御者に声をかけて、馬車を止めさせた。そこは大きな交差点のそばで、自分でドアを開けてロングがひよいと飛び降りたので、もちろん私もついていった。「待っていてくれ」とロングは御者に言い、目の前の店の中へ入っていった。

私は立ち止まって見上げたが、ロンドン市内ならどこにでもあるような普通の肉屋だった。ペンキで描かれた大きな看板が店の前にかけてあって、牛と豚の絵がある。ロングは店の中でもう主人と話し始めていたので、私もあわてて店の中に入って、会話に耳をすませた。

「そんなもの、何になさるんです？」肉屋の主人が、不審そうな顔でそう言うのが聞こえた。丸い帽子をかぶり、パイプをくわえ、白い大きなエプロンをした男だ。手にしている肉切りナイフは、菜切^{なつき}り包丁のように四角い。

「飼い犬にやるのさ」ロングが言いわけさく言った。

「犬？」肉屋は不審そうな表情を変えなかった。「どこの世に、焼けこげた牛の骨をかじるのが好きな犬がいるっていうんです？」

ロングは大げさにため息をついた。「それがわが家のブラック大魔王様なのさ」

「何の話をしてるんです？」

「犬の名さ。ブルドッグとチワワの雑種でな。それでもなぜか大きさはセントバーナードにも負けないというやんちゃ娘だ」

「セントバーナードって、でかい犬ですぜ」

肉屋はさらに不審そうな顔をしたが、ロングはかまわず続けた。

「ブラック大魔王様は最近ごきげんが斜めでな。家に帰っても、玄関から中へ入れてくれないんだ。入口のわきに陣取しんどったまま、オレをにらみつけ、うなり、ほえるんだ。オレはもう三日も寝室に入れないんだぜ。ずっとトイレのわきで寝泊りしてるんだ。頼むからオレを助けてくれよ。焼いた骨をちゃんと鼻先に置くだけで、ブラック大魔王様は天使のようになるんだから」

今度は、肉屋がため息をつく番だった。

「わかりましたよ。骨をストーブの中へ入れて焼けばいいんですね。灰がつかないように、上から針金でぶら下げときますか？」

「いやいや、ブラック大魔王様は灰の味が大好きときたもんだ。灰をくつつけとかないと、オレは食い殺されちまうよ」ロングは大げさに身体を動かし、恐ろしくてたまらないという表情をした。

「わかりました。じゃあ、このまま放り込みますよ」

私とロングの目の前で、肉屋は牛の骨を一本つまみ上げ、ストーブのふたを開けて、その中へ放り込んだ。炎を上げて燃えているまきの上に、骨はコロンと乗った。

「おお、ありがてえ。これで今夜はけつをかじられないですみまさあ。恩にきまずぜ、旦那。すっかりいいぐあいに焼けたころ、また取りにきますんで」

私とロングは肉屋から出てきた。肉屋の主人は、まだ不審そうな顔をして見送っていたが、私たちは馬車に飛び乗った。御者がムチをびしゃりと鳴らし、すぐに駅に着いた。だが私たちが馬車から降りたのは、正面の入口ではなく、貨物用プラットホームがある裏口だった。

鉄の大きな門が開いていて、中は広場のようになっている。荷馬車が何台もとまっていて、木箱や荷物が大小、何百個もゴチャゴチャと乱雑に置かれている。地面は、ボール紙の切れっぱしや木くずでおおわれている。そんな中を、手押し車を押したり荷物をかついだりした男たちが行き来し、ひどく混雑していた。

ロングは元気よく歩いていった。私は、また急いでついていかなくてはならなかった。広場をまっすぐに横切り、木箱や男たちをかき分けて、事務所の建物へ近づいていった。ロングは入口のドアに手をかけた。

事務所の中はだたっ広く、いくつも机が並んでいた。だが人は一人しかおらず、一番奥にある大きな机について書類仕事をしていた

が、顔を上げてこっちを見た。

「あー」ロングが話しかけようとした。

「あんたね」男はぶっきらぼうに答えた。「私は忙しいんだ。誰だか知らないが帰ってくれ」そして、また書類仕事に戻ってしまった。

それでもロングは、トコトコとそばまで歩いていった。男がもう一度顔を上げたので、のぞき込むようにして話しかけ、軽くウインクをしてみせた。

「オレは探偵助手なんだ。ホームズ先生はいま別の件でお忙しくてな。オレが下調べを任されてる。ホームズ先生は、ある荷物のことを知っていたいなさるんだが……」

男は目を丸くした。イスをガタガタいわせて立ち上がった。

「シャーロック・ホームズさん？ あの有名な？」

ロングは黙ってうなずき、ポケットから小さなカードのようなものを取り出して、男の鼻先につきつけて見せた。男は手を伸ばし、受け取って眺めた。私も首を伸ばしてのぞき込んだ。どうやら名刺らしい。『私立探偵シャーロック・ホームズ助手 ジョン・ロング』と書いてある。

男の顔色が変わった。

「ホームズ先生のご活躍は、いつも雑誌で拝見させていただいておりますよ」男はものすごくうれしそうな顔をして、両手を差し出してロングの手をつかんだ。ぶるんぶるんと握手をする。

ロングは、こっそりささやくように言った。

「昨日のことなんだが、荷物のことで何かありませんでしたかねえ。列車が着くのが遅れたとか、何かが紛失したとか」

男のほうも声を小さくして答えた。「さあ、待って下さいよ」

ロングは待っていた。

「そういえばありましたよ」男は話し始めた。「見たこともない東洋人の女がここに来ましてね、大きな声でガチョウみたいにかアガアわめきやがったんです。うるさくって、たまりませんでしたよ。」

その女の言うことにや、これが笑っちゃまうんですが、亭主がボンクラな野郎で、どっかに送る木箱の中に飼い猫を入れたまま、知らずにフタを釘づけして、この駅で発送手続きをすませちまったんだそう。猫がいなくなっていることに気づいた女が、必死になって追いかけてきたってわけ。だから女は、『その木箱がどこにあるのか教える』って言うんです。でもこの広い駅ですぜ。木箱なんて何百もあるんだ。いちいち探してなんかいられませんや。

私はそう言っちゃったんですがね、今度はその女、『じゃあここにある木箱をぜんぶ調べさせろ』って言いやがって。こっちだって忙しいし、そんなバカなことにはつき合っていられないと言ったんですがね、でかい声を出して泣いたりわめいたりするもんだから面倒になっちゃって、駅中の木箱を勝手に調べることを許してやったんですよ。

猫が入っているはずの木箱は、大きくて細長くて、ちょうど棺かんおけぐらいの大きさなんだそうで、それぐらいの大きさの木箱を探して歩いてましたよ。似た木箱はいくらだってありますからね。何十個も調べてました」

「それで、目的の木箱は見つかったのかい？」

「いいえ。もう発送されてたらしくて、見つかりませんでした。しよんぼりした顔で私のところへ戻ってきたんで、『届け先の駅に問い合わせてみる』と言ってやったら、しぶしぶ帰っていきましたよ。自分で問い合わせたろうと思いますね」

「それはどうだろうかね」ロングはつぶやいた。

「え、なんです？」

「いや、いいんだ。ありがとう。きっとホームズ先生もお喜びだろうよ」ロングは男に礼を言つて、私のほうを向きかけたが、再び振り返つて男を見た。「その東洋人の女は、片言の英語をしゃべったのかい？」

「いいえ」男は首を横に振った。「流暢なもんでしたよ」ジュウチャウナモンデシタヨ

「年はどのくらいだった？」

「そうですねえ、中年つてところですか」

私とロングが部屋を出ていこうとすると、男がまた言った。「このお名刺、いただいてもいいんですよね。女房にも見せてやりたくつて」

「もちろんでさあ」

私とロングは事務所を出た。また荷物と男たちの間をぬって歩き

はじめた。歩きながら、声を小さくして私は言った。

「あんなウソをついていいんですか？ 名刺まで用意して」

ロングは平気な顔で答えた。「かまやしねえよ。現実と小説の区別もついてないやつらのことなんか、気にすることはねえ」

再び辻馬車に乗って、北風ホテルに戻るようになった。ロングがステップに足をかけて、馬車の車体が大きく傾くと、馬が居心地悪そうに足踏みをした。ホテルに向かう途中で、もちろんさっきの肉屋に立ち寄って、ロングは『いい具合に焼けた』牛の骨を手に入れた。「あちあちあち」と言いながらハンカチに包み、上着のポケットに入れた。

ロングと私は、北風ホテルの正面で馬車を降りた。せかせかした足取りで玄関を入りながら、ロングが言った。

「メイドの佐藤は、たしか英語はしゃべれないんだったな？」

「ええ、だから私が通訳なんです」

「ああ、そうだったな」

階段をいくつかが上がって、赤いじゅうたんが敷かれた廊下を通り、加奈の部屋の前に着いた。このホテルで一番上等な部屋で、大きなリビングと寝室とバルコニーと、作りつけの小さなキッチンがある。建物の角にあつて、とても日当たりがいい。窓の外には、噴水のある中庭の景色が広がっている。使用人のための小部屋も付属していて、佐藤はそこで寝起きしていた。

ロングがノックすると、佐藤が中から開けてくれた。佐藤はいつものようにすきのない感じで、きちんとドレスを着ていた。つねに髪をきつくひつつめているが、この時は少しおくれ毛があり、白髪も普段より多く見えるような気がした。いつもはないしわが目の下にできていて、ひどく疲れている様子だったが、泣いていたのではないようだった。話すときに、少し唇が震えるのが目についた。

「冬子さん、遺体が見つかったことはお聞きになりましたか？」佐藤が言った。

「ええ、ゴールド警部が知らせに来てくれました。だから今、この探偵さんと一緒に捜査を……」

突然ロングが大きな声で話し始めたので、私はひどく驚いた。私は目を丸くしていたに違いないが、ロングはおかしな表情で見つめ返して、にっと笑った。ロングは英語でこう言ったのだ。

「心配にはおよばんよ、マダム。見つかった死体は別人だとわかった。加奈の死体ではなかったんだ」

私には、ロングを見つめ返すことしかできなかった。ロングは軽く私をつつき、また言った。

「さあおまえ、いまオレが言ったことをこの女に言うんだ」

「でも…」私はささやき返そうとした。

「バカ」ロングは私をさえぎった。「通訳をしろ。役立たず」

仕方なく、私は佐藤のほうを向いた。「見つかった死体は別人でした。加奈さんではありませんでした」

「そうなのですか」佐藤は息をついた様子だった。

私とロングは居間に通された。広い部屋で、壁も天井も真っ白に塗られ、淡いピンクのじゅうたんの上にふかふかのイスやテーブルが並んでいる。暖炉もあって、火が入っていた。

「おかけになって下さい」と佐藤は言おうとしたが、もうロングは勝手に長イスに座ってしまっていた。

私はロングと並んで座った。私はひざを曲げて、ほんの軽く腰かけたただだったが、ロングはゆったりと深く座って、いかにも楽し

そうにしている。今にもニヤニヤ笑い始めるのではないかという感じだ。この男の頭の中はどうなっているのだろうという気がした。

ロングの体重のせいで、クッションはぺちゃんこになってしまっている。佐藤も腰かけたが、身体の前でずつと両手を組んでいた。その様子はあまりにも固く、まるで石でできた女のような感じた。

私にも佐藤にも、特に話すべきことはなかった。一分かそこら、どことなく気まずい沈黙が続いていたのだが、不意にロングが口を開いた。

「すまねえが、何か飲ませてくれねえかなあ。のどがかわいちゃってさ」

あまりにも無神経なので私はあきれてしまったが、そのまま通訳するしかなかった。

「お茶をいれましょう」佐藤が立ち上がり、背中を見せてキッチンへ向かった。

「悪いね」

少しして、佐藤が盆を持って戻ってきた。私とロングの前にカップを置き、茶をつぎはじめた。

「あれ、佐藤さんは飲まないんですか？」と私は言った。佐藤は二つしかカップを持ってきていなかったのだ。

「私はいただきますありませんので。よろしければ、お菓子もどうぞ」佐藤は、小皿に乗せたクッキーをこちらに滑らせてよこし、すぐに下を向いてしまった。空腹だったので、私はクッキーに手を伸

ばそうとした。

「おっとすまねえ」

ロングの大きな声がした。カチャンという音も聞こえた。

ロングの足下にティーカップが落ちて、割れてしまっていた。紅茶もこぼれて、じゅうたんの上に広がっていきつつある。

「私の手が当たりましたか？」そんなはずはないと思いながら、私は言った。

「いや、オレのせいだ。うかつなことだよなあ。すまねえが、ホテルのメイドを呼んでくれねえかな」

「後片づけなら私が」佐藤が立ち上がろうとした。

「それでは申しわけねえや。ホテルの人間を呼んでくれ」ロングはくり返した。

「私が呼んできますよ」私は立ち上がった。

「その」佐藤が言った。「廊下を右へ行つたつき当たりに地下へ続く階段があつて、そのわきに控室があります。メイドはそこにいますでしょう」

「そこはボイラー室の真上かね？」ロングが言った。

佐藤は一瞬、ぽかんとした顔をした。それから顔を赤くし、なんとか感情を押さえ込んだようだった。「はい、そうです」

ロングがくすくす笑いはじめた。私はぽかんと見つめていた。

「ロンドンの空気には、吸っているだけで英語が話せるようになる奇跡の力がそなわっているのかもしれない」ロングは笑い続けた。「なあ佐藤さんよ。あんたは、いつの間に英語ができるようになったんだい？」

私もやつと気がついた。ロングはすました顔で続けた。

「そのボイラーだけどさ。ホテル全体を暖房するためのものだから、かなりのサイズだよな。死体の一つや二つ、簡単に燃しちまえるぐらいのさ」

佐藤の顔が再び赤くなり、すぐに真っ青になった。ロングは静かに続けた。

「そうだろう？」

「何の証拠があつて……」佐藤は大きな声を出した。

「さつきボイラー室へ行つて、灰の中をかき回していたら、こんなものが出てきた」

ロングは上着のポケットに手を入れ、ハンカチに包んだものを取り出し、テーブルの上にそつと置いた。

「なんです？」

「自分で開けてみなよ」

長い間ためらっていたが、とうとう佐藤は手を伸ばした。その手が震えていることに気がついた。佐藤の指が触れ、ハンカチのはし

をそつと引いた。コロンとひっくり返って、焼けた骨がテーブルの上に転がり出た。佐藤の身体がびくと動いたが、悲鳴は上げなかった。

「そんなはずはありません。あのときは長イスを燃やしたはずですよ。佐藤はロングをにらみつけた。」

「だがそれを、あなたは自分の目で確かめたわけじゃなからう？ あんたが駅でやった芝居は、はじめからまったくの無駄だったわけさ。あの男たちはとんだ食わせ者さ」

真つ青な顔をしたまま、佐藤は首を横に振り続けた。そしてそのまま、長イスの上にどたと気を失ってしまった。

ロングに命じられてフロントへ走っていき、すぐにゴールド警部を呼んでもらった。

ゴールドは十五分もしないうちに現れたが、何もかも一から説明してやるのが面倒ならしくて、ロングはとても機嫌が悪かった。

すでに佐藤はベッドに横たえられていた。佐藤はまだ目を覚まさず、気になったので私はそばについていた。ドアは半開きのままだったから、ロングがゴールドに事情を説明してやっている声が、隣の部屋から低くぼそぼそと聞こえてきた。

「だからゴールドの旦那」ロングはいらいらしているようだった。「佐藤が犯人なんですよ。凶器は何かつて？ 動機？ そんなことオレは知りませんよ。調べるのは旦那の仕事でしょう？ フィッシュはオレに犯人探しを依頼したただけなんだから。」

ええ、そうです。佐藤が加奈を殺しました。同じ夜、このホテルには二人の東洋人が宿泊していて、日本人であることはまず間違いないませんが、死体を始末するのを手伝ったんです。家具屋に送り返す予定で梱包されていた長イスを木箱から引っ張り出し、代わりに死体をつめました。

その長イスはどうしたのかって？　ボイラーで燃しちまったんじゃないですかね？　翌朝、ホテルの連中は何も知らずに、死体入りの木箱を駅へ運んだんです。

その二人組が、なぜ佐藤に協力したのかですって？　それも知りませんな。それを調べるのも旦那の仕事でしょう？　もう遅すぎるかもしれないが、人相はわかってるわけだから、駅や港に手配したらどうです？

ええ。佐藤は駅へ行き、一芝居演じました。詳しいことは駅員にきいてください。シャーロック・ホームズ好きな駅員がすべて話してくれますよ。混雑した貨物駅の中で、佐藤は荷札を張替える工作をしたんです。二つの木箱の荷札を交換したんですよ。

あんなに騒がしい場所だから、誰も気がつかなかったでしょう。だから死体は石膏像と入れ替わって、全然関係のない家へ行ってしまうんです。

ええ、支配人から住所を聞いて、家具屋へも行って見たらどうです？　古ぼけた長イスが入っているはずなのが、なぜか石膏像が入っている木箱が届いて、きっと頭をかかえているはずですよ……」

不意に手をつかまれ、私は驚いて振り返った。ベッドから身体を起ここしかけている佐藤と目が合った。

「お嬢様、この罪はすべて私に着せてください」佐藤がささやいた。

「でもおまえは…」

「お嬢様には、まだすべきことが残っているはずですよ。そのためであれば、私は喜んでしばらく首になりましょう。さあ、ロングたちが話をやめました」

耳をすませると、隣の部屋の話し声はもうやんでしまっていた。二人の男たちが近寄ってくる足音がする。

「よろしいですね」

佐藤は最後にそう言って、目を閉じて、まだ気を失っているふりをした。ゴールドが入ってきて、私を部屋から追い出した。

加奈のヨーロッパ旅行はこういう結末に終わり、私は一人で日本へ帰ってきた。そして女学校の寮に戻ったのだが、ある日叔父がやってきて、こういったのだ。

「冬子、私は仕事でロンドンへ出張することになったんだが、一緒に行かないか？」

もちろん私は、張子^{はりこ}のトラのように首を縦に振った。一カ月後には、胸を潮風でいっぱいにながら、汽船のデッキにいた。大陸行きの船で、東京湾の水はウーロン茶のような色をして、嫌な匂いを放っていたが、まったく気にならなかった。叔父はもう船に酔って船室で伸びていたが、私は元気いっぱい、デッキの上を何回も往復して歩いた。

数日後には大陸の港に着き、列車に乗り換えた。二週間後、とうとうフランスに着いた。ここでまた船に乗り換えて、海峡を渡って、イギリスに上陸した。列車に乗って半日走って、とうとうロンドンに着いたのだ。

叔父はある鉄道会社で働いていて、その会社がロンドンのE B B C社に電気機関車の製造を依頼し、それが完成したと連絡があったので、こうやって受け取りに来たのだった。

ロンドンに着いても、数日の間は叔父のおともをして、機関車工場や船会社など、あちこち歩いた。だがそれもすんだので、一人でロンドンの町を見物して歩くようになった。叔父も何か用があるとかで、毎日どこかへ出かけていた。

その日、私がホテルへ帰ってきたのは午後六時ごろだったが、叔父はまだ戻ってきてはいなかった。空腹だったので、レストランで一人で食事をした。だが夕食を終えても叔父は帰ってこなかった。ホテルの従業員にきいてみたのだが、叔父は昼前に出かけたが、どこへ行ったのかはわからないという返事が返ってきただけだった。

私は部屋へ戻った。十時をすぎても叔父は現れなかった。待つていても仕方がないので、ベッドに入って休むことにした。毛布にくるまり、二分後には眠り込んでしまっていた。

だが真夜中すぎ、ドアを強くノックする音で目を覚ました。私は身体を起こして頭を振ったが、ノックはまだ聞こえている。部屋の中は真つ暗だった。カーテンに手を伸ばして、外のガス灯の明かりを入れ、時計を見たら午前一時だった。

ベッドを出て、裸足のまま歩いてドアを開けにいった。ドアの外には一人の男が立っていた。顔には見覚えがあった。

「ゴールド警部？」廊下の明かりがまぶしいので、私は目をぱちぱちさせながら言った。

「一年ぶりですか、冬子さん」ゴールドも言った。

「何の御用です？ まだ夜中ですよ」

「それはわかっています」ゴールドの表情がいかめしく変わった。
「あなたの叔父が殺害された件について、おたずねしたいことがあります。署まで来ていただきましょう」

「えっ？」

「すぐに着替えてください。三分差し上げます」

私にはどうすることもできなかった。すぐに着替え、部屋から連れ出されるしかなかった。手錠をかけられたりはしなかったが、ゴールドと婦人警官に連れられて、私は階段を降りていった。ロビーを横切るとき、心配そうな顔で支配人が見送ってくれたが、何も言わなかった。

通りは暗く、人通りもなかった。黄色いガス灯の暗がりには隠れるようにして、真っ黒に塗られた警察馬車が止まっているのが見えた。ゴールドはドアを開け、私をその中に押し込んだ。御者がムチを鳴らして、馬車は動き始めた。

「叔父さんが殺されたんですって？」私は言った。

意外にも、ゴールドはかすかに微笑んだ。

「叔父上は昨日の午後三時ごろ、地下鉄車内で死亡しているのが発見されました。座席に腰かけたきり、まったく動かないので車掌が不審に思い、揺り起こそうとしたら死んでいたのだそう。検視の結果、体内から毒物が発見されました。」

詳しい分析はすんでいないので、毒物の名称まではまだお答えできませんが、一服盛いっぶくもられたのは間違いありません。ポケットを調べてもサイフは見つかりませんでした。犯人が持ち去ったのでしょうか」

馬車は警察署に着いた。私は降ろされ、婦人警官たちに手を引かれて、建物の中へ入っていった。

ひどく心細かったが、玄関に入ってすぐのところになんか小さなホールがあり、ロングがいて、あたりを見回していることに気がついた。一年前と変わらず、しわしわの服装をして、髪の毛はぐしゃぐしゃで、無精ひげが生えている。私に気づき、重いブーツをドタドタいわせながら近寄ってきた。

「ロング大尉、なぜこんなところにいるんです？ まさか、この事件と何か関係がおりなんですか？」ゴールドが声を上げた。

ロングはポケットから何かを取り出し、手に持って振り回した。タバコの箱ぐらいの大きさで、そう重いものではないようだ。

「旦那はこれを、内務省へお届けになったんでしょう？」

「ええ」ゴールドはうなずいた。「被害者のポケットの中にあつたものですが、正体がわからなくて、意見を求めたんです」

私がじつと眺めているものだから、ロングはそれを私に向けて差し出した。私は受け取って眺めた。

金属製の板だ。だが普通の金属とは違って、金色と銀色の混じった不思議な色合いをしている。半分に割ったパイプのような形で、ネジでとめる穴が二カ所あけてある。見かけよりもずっと軽いのも不思議な感じだ。薄っぺらいのにひどく固い。思いっきり力を込めても、そう簡単には曲がらないだろうと思える。鼻を近づけてみたが、匂いはまったくなかった。

顔を上げ、私はロングとゴールドの会話に耳をすませた。私の手の中にある金属板を指さし、ロングが再び口を開くところだった。

「そいつの正体が内務省にもわからなくて、もしやということとで海軍に問い合わせたんです。それで大騒ぎになって、オレが駆け出されてきたってわけさあ」

「大騒ぎといいますと？」

ロングはしかめっ面をして、もう一度ポケットに手を入れ、今度一枚の紙を取り出した。広げてゴールドの鼻先に突きつけた。ゴールドも顔をしかめたが、受け取って眺めた。

「なんです？」

「この件についてはすべてをオレにまかせるって委任状です。海軍大臣と内務大臣のサインがあるでしょう？　今やオレは、この事件の捜査をすべてまかされた身ってわけですよ」

「というと？　私には意味がよくわからないのだが？」

「要するに、その金属板と小娘はオレが預かるってことです。オレもこんな仕事はやりたかねえが、おまんまは食わなきゃならないんでね」

そんなふうにして、私は警察署から連れ出された。ゴールドは不満そうな顔をしていたが、何も言わなかった。

すぐにロングは辻馬車を呼び、私を車内に押し込んで、ホテルへ送り届けさせた。自分はそのまま徒歩で闇の中へ消えていったので、どこへ行ったのかは知らない。

翌日、私はとても忙しかった。朝食をすませて、すぐに町へ出かけた。まず大使館へ行き、叔父が殺害されたことを伝えた。そのあ

と、日本へ向けて電報を打った。あて先は、叔父が働いていた鉄道会社においていた。

『叔父死ス。指示ヲ求ム』

返事が来るまで、数日待たなくてはならなかった。E B B C社へ行き、叔父の死を告げると社員たちはひどく驚いた顔をしたが、「電気機関車の引き渡し準備は予定通りに進める」と言った。

たくさんの人に会い、すっかりくたびれて、夕方私はホテルに帰ってきた。ロビーに足を踏み入れると、退屈そうに新聞を読みながらロングが待っているのが目に入った。そばのテーブルには灰皿があり、吸ガラでいっぱいになっている。何本も何本も、まるで蒸気機関車のように煙を噴き上げ続けたのだろうが、ロビー全体が煙くさくなっているような気がした。

ロングも私に気づき、片手を上げて合図を送ってきた。少し離れたところから、支配人がありがたくなさそうな顔で眺めていたが、その表情には気がつかないふりをすることにした。

「おう、帰ったな。今日はどんな一日だった？」ロングが言った。

「大使館やE B B C社へ行って、とても忙しかったわ」私はロングの向かい側に、ドスンと腰かけた。

「E B B C社は何か言ってたか？」

「ううん」私は首を横に振った。

「そうかい」

ロングはまだ新聞紙を手にしたまま、何秒か黙っていた。考えごとをしているようだったので、私は邪魔をしないように静かにしていた。少ししてロングが口を開いた。

「おまえは明日もE B B C社へ行くのか？」

「いいえ、用はないから行かないわ」

「行けよ」

「えっ？」

「明日、オレをE B B C社へ連れていくんだ」

「どうして？」

「ごちゃごちゃうるさいガキだなあ」ロングは新聞紙をイスの上に放り投げた。「オレは向学心にあふれているから、電気機関車のことが勉強してえんだよ。ああ勉強したい勉強したい」

仕方なく、連れていくことを約束するしかなかった。

ロングとは翌朝、再びホテルのロビーで待ち合わせた。

ロビーが煙だらけにならないように、私は早めに行って待っていた。ロングはすぐに現れた。そのあと辻馬車に乗ったが、車内でもロングは盛大にタバコを吸い始めたので、私は露骨に嫌な顔をしてやった。だがロングはにやりと笑うだけで、何も言わなかった。私

は窓を開け、ゲホゲホとわざと大きなせきをしてやった。

「ああそうだ」私は突然思い出した。

「どうした？」ロングは六本目のタバコを吸い終え、吸ガラを窓の外へ投げ捨てたところだったが、私をじろりと見た。

折りたたんだ小さな紙をポケットから取り出し、私はロングに手渡した。

「叔父さんが読みかけていた本のページに、こんなものがはさんであつたの。何かのメモみたいよ」

ロングは不審そうな顔をして紙を広げたが、すぐに表情が変わった。

「メモねえ」

『12・ビール・ボトル』

「意味がわかる？」私は言った。

「ビールびんが12本ということか？ おまえの叔父はそんなに酒飲みだったのか？」

「いいえ、ほとんど飲めない人だったはずよ」私は肩をすくめた。

「ふうむ」ロングは小むずかしい顔をして考え込んでしまったので、ほっておくことにした。

ロングが見かけほどバカな男ではないということを、私はよく知っていた。だが私も完全に信用し、すべてを話していたわけではない。このメモを叔父の本の中で見つけて、意味がわからなくて当惑しているのは事実だった。だがそれ以外の事実を、私はロングにはほとんど話してはいなかったのだ。加奈の事件のときも、このひげ面のバカのおかげで、私は警察から疑われることすらなかったのだ。木箱から長イスを取り出し、かわりに加奈の死体をつめる手伝いをし、その翌朝あわただしくホテルを離れていった二人の共犯者など、ロングの空想にすぎないのだ。

叔父が死んだ日のこともそうだ。あの朝私は、叔父と一緒に町へ出かけ、地下鉄に乗ったのだ。叔父はチョコレートに目がなく、私がポケットから小箱を取り出してフタを開けてみせるだけで、につこり笑って、何一つ疑うことなく、つまんで口に入れたのだ。それが人生最後の一口になるとは、思ってもいなかったに違いない。

地下鉄の車内はよくすいていたから、駅に着いたときをみはからって、叔父の死体を残してさっと下車するのは難しい仕事ではなかった。ポケットの中にあつた叔父の持ち物も、強盗事件に見えることを期待して、私がぬき取ったのだ。そのまま地下鉄の窓から投げ捨てた。

馬車がE B B C社に着き、門番に名を告げると、すぐに工場長が迎えてくれた。私とロングを連れて、工場中を案内してくれた。

とても広い工場で、レンガ造りの背の高い建物の下で火花が飛び散って、何十人も従業員と一緒にクレーンが音を立てて動いていた。どこかでハンマーを使っている音が、ドカンドカンと常に聞こえている。世界中へ輸出する電気機関車を組み立てている。

ロングはとても熱心で、電気機関車の馬力や電圧、各部の構造とが重さといったことを詳しく工場長に質問していた。わけがわからなかったが、私は黙っていた。

工場からの帰り道、馬車の中で私は言った。

「電気機関車はおもしろかった?」

「ああ、実に興味深い機械だったな」ロングはニヤニヤ笑って、私を横目を見た。いかにもずるがしこいタヌキのような顔だ。

「どのあたりが?」

タヌキのような顔をしたまま、ロングはおかしそうに私を見つめ返した。

「特にあのでかい車体がさ」

「へえ」

「これで今日の仕事は終わりだ。ホテルまで送ってやるよ。だがな、その前にちよつと寄るところがあるから付き合え。時間はとらせねえ」

「ええ」

ロングは窓の外に身体を乗り出して、御者に言った。

「『沈黙クラブ』へやってくれ」

御者はすぐに了解したようで、次の角で馬車は右へ曲がり始めた。

「何クラブですって?」

「沈黙クラブか？ オレの親父が所属しているクラブでな。ロンドン中の変人が集まる変人クラブさ。クラブ内に一步でも入ったら、メンバーはたがいのことに注意を向けちゃいけないって規則があるぐらいだからな。どんな理由があっても、談話室以外では会話もしちゃいけないときた。それに三回違反したら除名だってんだから、普通じゃねえや。」

今の時間なら、親父はそこにいるはずでな。ちよつと頼みごとをしたものだから、返事が聞きたいのさ」

すぐに馬車はそのクラブの前についたが、私は降ろしてはもらえなかった。ロングはひょいと飛び降りて、すぐに戻ると言って、一人で建物の玄関を入っていつてしまった。

私は窓から眺めていたのだが、黒い石でできた背の低い建物で、ごく小さな看板が正面にかかげられている他は、建物の正体を示すものは何もなかった。たしかに、人間嫌いたちの隠れ家としてはうってつけなのかもしれない。

ロングは二分もしないうちに戻ってきて、また馬車が走り始めた。ロングは、小さな紙きれのようなものを手に持っていた。半分に折ったメモ用紙のようなものだ。それで鼻の頭を軽くたたきながら、考えごとをしているようだった。だが不意に、それをひょいと私のほうへ突き出してよこした。

「見てもいいの？」

何も言わず、ロングは軽く頭を縦に振った。

私は受け取って広げた。ちぎり取られてはしがギザギザに破れた紙で、見たこともないほどきたない文字が書いてある。まるでぐらぐら煮えた鍋の中でのたうつタコの足のようだったが、想像力を総動員して、何とか読むことができた。

親愛なる息子へ。

おまえの推測どおり、一機が盗難にあつておる。日時は先々月の十五日、海軍造船所から煙のごとく消え失せた。極秘で調査中だが、我々はいまだなんらの手掛かりもつかんではおらぬ。

私には、海軍が何の盗難にあつたのやら見当もつかなかったが、ロングはそれからまったく口をきかずに、私をホテルへ送りどけた。

だがホテルに着く直前、翌日もロングに付き合つて、一緒に出かけることを私は約束させられてしまった。今日とは違って、午後遅くの夕方近い時刻にということだったが、同じようにホテルのロビーで待ち合わせる事になった。

ロングと別れて、一人で夕食を食べていると、私あてに届いたという電報をメイドがもってきてくれた。開いてみると、差出人は日本の鉄道会社で、「貴殿を臨時社員に任命するので、機関車を船積みし、至急帰国してもらいたい」という内容が手短に述べられていた。

翌日の夕方、約束した時間が近づいて、私は早めにロビーに下りて待っていたのだが、やってきたロングはいつもとは違って、少し緊張した顔をしているように見えた。

それに今日は、ホテルの前に辻馬車を待たせていた。一緒に乗り込もうとしたとき、油の入った石油ランプといかにも道具箱という感じの木箱が馬車の床の上に置かれていることに気がついたが、余計な質問はしないことにした。私たちが乗り込んで、馬車は走り始めた。

二十分ほど走ってやっとなり、私たちが降りたのは、町はずれのひとけのない場所だった。ロンドンにもこんな場所があるのかと思えるような風景で、見回しても、岩山と森のようなものしか目に入らない。一軒か二軒、かやぶき屋根の農家が遠くに見えているが、それ以外には本当に何も無い。太陽もほとんど沈みかけている。

「こんなところで何をするの？」私はなんだか心細くなった。

「ああ？」

ロングは私の前を歩き出そうとしていたが、平気な顔で振り返った。手には、さっきの石油ランプと木箱を抱えている。ランプのほうはともかく、木箱はいかにも軽々とかかえているから、中身はきつと空なのだろう。石油ランプには炎をおおうカバーのような部分があり、ガラスでできているのだが、そのガラスが赤く着色されていることに気がついた。

「あつちを見ろよ」

立ち止まって、ロングは前方を指さした。道が少し下りになり、谷間のようなところへ通じているのが見えた。そこを鉄道の線路が走っているのも見えた。二本のレールが銀色に光っている。

「汽車の線路だわ」

私はロングを振り返った。ロングはマッチをすって、ランプに火

を入れようとしていた。ランプはすぐに燃え上がり、ぼんやりとした光だったが、赤く輝き始めた。

「それをどうするの？」

ロングはにやりと笑って、ランプと木箱をかかえ、また歩き始めた。

「まあ見てなうて」

私たちは線路へ向かって降りていった。あたりはもうすっかり暗くなって、いくらもたたないうちにたがいの顔を見分けることも難しくなるだろう。線路のわきに立ち、ロングはポケットから時計を出してきて、ランプの光にかざして眺めた。

「さあ、そろそろくるぜ」

遠くから汽車の汽笛が聞こえてきたのはそのときだった。すぐにレールがキンキンと鳴り始めた。

「おまえはそこに隠れている」ロングが振り返り、線路のすぐそばにあった大きな岩のかげを指さした。

「どうして？」

「言う通りにしろ。列車が止まったら、どこでもいいからさっと乗り込め。オレもすぐに追いつく」

わけがわからなかったが、それ以上話している余裕はなかった。もう汽車のヘッドライトが見え始めていた。私は岩陰に飛び込んだ。顔だけを出してこっそりのぞき見ると、ロングがランプを高くかかげ、汽車に向かって大きく振り始めるのが見えた。いかにも道具箱

ふつの木箱をかたわらに置いている。

ロングはランプを振り続ける。赤いランプだ。機関士から見れば、非常信号のように見えるに違いなかった。すぐに急ブレーキがかかった。上り坂だからスピードは出ていなかったのだ、完全に停車するのにはいくらかからなかった。

ロングが私をちらりと見て、目で合図を送ってきた。私はさっと飛び出し、蒸気機関車のすぐ後ろに連結してあった車両の手すりをつかみ、ハシゴのようになったステップを駆け上がった。そこは広いデッキになっていて、楽に立つことができる広さがあった。ここなら炭水車が目隠しになって、機関士に見つかってしまってもない。

私はそこに立ち、手すりをつかんだまま耳をすませた。ロングの大きな声が聞こえてきた。

「なあ、これはスミス公爵夫人の専用列車かね？」

「なんだって？」機関士が大きな声でき返すのが耳に入った。

「これはスミス公爵夫人の専用列車かね？」ロングは同じことをくり返した。「今日、ポーツマスまでお乗りになるんだろう？ トイレの調子がおかしいから修理をしてくれと言われて来たんだが」

「あなた、何を言ってるんだ？ これが公爵の専用列車に見えるか？」機関士が身体を乗り出して、後ろを指さす姿が目に見えるような気がした。「これは日本に輸出するための電気機関車だ。今から港へ持っていくところだ」

ロングは、いかにもぼんやりした男という声で答えた。「本当け

？　じゃあ公爵夫人の列車はいつ通るんだ？」

「それは昨日のことだ。あんた、酔っ払って丸一日寝過ごしたんじゃないか？」

「そ、そんなバカなことがあるけ？」

「知らねえよ」機関士は大きな声で笑い始めた。「公爵夫人がトイレで不自由しなかったことを祈るね」

「待ってくれ」ロングは声を上げかけたが、機関士は無視してポツと汽笛を鳴らし、ブレーキをゆるめた。大きな笑い声を上げながら、列車を発車させた。

我慢できなくなつて、私は首を伸ばしてのぞき見たが、ロングはいかにも呆然とした表情で突っ立っていた。だが機関士の目が自分から離れると、さつとランプを吹き消し、木箱と一緒に線路ばたに置いて、駆け出すそぶりを見せた。すばやく手すりをつかみ、数秒後には電気機関車のデッキに乗り込んで、私と並んでいた。機関士が口にするまで気がつかずにいたのだが、私は電気機関車のデッキの上にいたのだった。

振り返ると、地平線の下に沈んだ太陽から漏れてくる最後の光で、空腹のせいで機嫌の悪くなった熊のような顔をした電気機関車と見合うことになった。屋根の上には大きな丸いヘッドライトが乗っている。

列車は、再び坂を登り始めていた。スピードが出ず、蒸気機関車は苦しそうに大きな音を立て、煙を噴き上げている。

「キーを持ってきたか？」 ロングが言った。

「うん」私はポケットに手を入れて、引っ張り出した。E B B C 社の社員たちが私に持たせたのだった。

「よし、ドアを開けろ」

私は鍵穴に差し込み、電気機関車のドアを開けた。

一步入るとすぐに運転室があり、ロングはポケットから携帯用の小さなランプを取り出して、マツチをすって火をつけた。真っ暗だった運転室が、オレンジ色の光で照らし出された。壁は明るい灰色に塗装してあった。大きな窓が前方を向いて開いていて、そばには運転席がある。もちろん今は誰も座っていない。

運転席の背後には、機械室へ通じるドアがあった。これには鍵はないので、ロングが開け、中に姿を消した。私もついていった。

叔父と一緒にいた間に、私も電気機関車のことを少しは知るようになっていた。機械室の中の様子も頭に入っていた。だがこのとき、ロングの持つランプに照らされた機械室内部の風景は、それとはまったく違っていたのだ。

見覚えのある電気機器など影もなく、見たこともない機械が部屋の中央に座っていたのだ。動物園にいる象の二倍ぐらいの大きさがあり、中央に太い軸が見えていて、いびつなカボチャのような形のボディーの表面には金属のパイプが何十本もヘビの大群のようにまとわりつき、走り回っていた。

口をぽかんと開けたまま、私は長い間突っ立っていた。

「やっぱりここにあったか」とロングがつぶやくのが聞こえた。振り返って私をちらりと見て、うれしそうな顔をした。

「これは何なの？」

「蒸気タービンという船のエンジンだ。イギリス海軍ご自慢の最新技術さ。そのわりに造船所の警備はおそまつで、簡単に盗み出されちまったが」

「叔父さんは泥棒の一味だったの？」

「まあ、そういうことだな」

身体力が抜けて、私は床の上に座り込んでしまいそうな気がした。ロングが気づいて腕をつかみ、運転台まで連れていってくれた。私を機関士のイスに座らせた。

「世の中いろいろあらあな」ロングは窓を開け、ポケットから取り出したタバコに火をつけた。

列車が止まったのは、二十分ぐらい後のことだった。ブレーキの音が聞こえ始めたので窓の外を見ると、いつの間にか港に着いていたのだ。埠頭のどこかのように、黒く塗られた貨物船の横腹がすぐ隣に見えていた。

ロングが窓から顔を出し、大きく指笛を鳴らすのが見えた。真っ暗な中に、ピュツと鋭い音が響いた。外から足音が近づいてきて、入口のドアががちゃりと開いた。ロングがランプをかざすと、その光の中に、見たことのない男の顔が浮かび上がった。

「こつちだよ、兄貴」ロングの声が聞こえた。

兄貴と呼ばれたのは、タワシのように濃いヒゲを鼻の下に生やした男だった。髪をきちんと短くかり、いかにも育ちがよさそうだが、青い目で冷ややかに車内を見回した。

「これが例の小娘だ」ロングが私を指さした。次に兄を指さした。

「これはオレの兄、ウイルソン海軍少佐殿さ」

「この娘も賊の一味ではないのか？」ウイルソンは、いかにも気に食わない顔で私を見た。

「違うさ」

「ふん」ウイルソンは鼻を鳴らした。「で、例のものはどこにある？」

ロングは、黙って機械室へ通じるドアを開けた。ウイルソンはランプを受け取り、弟をじろりと見つめ返し、何も言わずにドカドカ通り抜けていった。だが何秒もしないうちに、ウイルソンはそこから飛び出してきた。明らかに興奮して、顔を赤くしている。

「信じられん。なんてことだ」

「オレの言うことは正しかったろ」ロングがうれしそうに言った。

ウイルソンは弟を眺めた。髪はぼさぼさで、無精ひげがあつて、よれよれのシャツを着て、ズボンにはしみのある姿だ。靴など、最後に磨いたのがいつなのか、悪魔しか知らないだろう。

ウィルソンは、弟の姿に一瞬で興奮が冷めてしまった様子だった。
「おまえこそ賊の一味じゃなきゃいいのだから」

「ちつとは感謝してほしいね。見つからなかったら大事になるところだったんだろ？」

「感謝だと？」ウィルソンはまゆを上げた。すました顔をして、私に向けて片手を差し出した。にっこり笑って、私と握手をした。「ご協力に感謝します。何とお礼を申してよいやらわかりません。我々は、もう二か月以上もあれの行方を捜しておったのです」

ロングは口をぽかんと開けていた。「見つけたのはオレだぜ。フイッシュは座ってたただけだ」

「だが、このレディの協力がなければ発見できなかったはずだ。我々の感謝は彼女にささげられるべきだ」

「けっ」ロングが大きく鼻を鳴らすのが聞こえた。

私たちは運転台から出て、地面に降りた。急なステップを降りるとき、先に降りたウィルソンが、振り返って私の手を取って助けてくれた。貴婦人になったような気がして、鼻が高かった。

電気機関車のまわりは、いつの間にか水兵たちによって取り囲まれていた。みんな銃を持ち、緊張した表情をしている。

少し離れたところに手回しよく辻馬車が待機していて、ロングが合図をして呼び寄せた。ドアを開けてもらって乗り込みながら、私は言った。

「叔父さんのポケットに入っていたのは、蒸気タービンの部品だっ

たのね」

続いて自分も乗り込んできながら、ロングはうなずいた。

「タービンブレードという最も重要な部品だった。それを見せられて英国海軍が大騒ぎをして、だが秘密を要する仕事でもあるから、オレのところへお鉢が回^{はち}つてきたというわけさ」

馬車が動き始めた。ロングがタバコに火をつけたので、煙が私のところへも派手に流れてきたが、今回だけは迷惑そうな顔はしないことにした。これはこれで一つの手柄には違いないのだから。

「叔父さんは、なぜ殺されたの？」

ロングはタバコの煙を深く吸い、ゆっくりと長くはき出した。ポケットに手を入れた。

「これを見な」

ロングがポケットから取り出したのは、以前私が渡した紙切れだった。白い紙に『12・ビール・ボトル』と書かれている。

「その意味がわかったの？」

「おまえの叔父のイニシャルは、間違いなくY・A・だよな」

「ええ」私はうなずいた。

「じゃあ、これも見な」ポケットに手を入れ、ロングは別の何かを取り出した。

受け取って眺めたが、新聞の切抜きだった。くしゃくしゃになっ

て、ケチャップのしみもついていたが、広げると広告欄だった。日付は、叔父が殺される数日前になっている。一行広告というやつで、企業や商店が出す大きなものではなく、一行か二行を個人が借り切る小規模なものだった。料金も安く、求人や人探しなどに利用されていた。ロングはある行を指さした。

『釣りざおを売りたい。著名な一級品なり。北風ホテル気付、Y・A・』

「叔父さんが出した広告なの？」私は顔を上げた。

ロングはうなずいた。

「あれは新聞社の住所だった。『ビルびん通り12番地』という意味さ。行ってみると『偉大なるロンドン市民』紙の編集部があり、古新聞の山をあさって、この広告を見つけたというわけさ」

「叔父さんは釣りざおなんか持っていなかったわ」

ロングは鼻で笑った。

「『偉大なるロンドン市民』紙はまともな新聞じゃない。ロンドン裏社会の情報紙みたいなものだ。ちよつと事情に詳しいものなら誰でも知っていることさ。載っている広告の大部分は、本当の意味をカモフラージュしてある。」

隠語というのがあってな。『釣りざお』とは盗品の宝石のことだ。おまえの叔父は蒸気タービンを盗むだけでなく、盗品を売りさばく目的も兼ねてロンドンへきていたのさ。まったく大した男だよ。だがそんなやばい仕事だぜ。荒っぽい連中に出くわして、宝石だけじ

やなく命まで取られてしまったとしても、何の不思議もなかるうよ」

加奈に続いて叔父までが死んでしまうと、青野家の血を引いているのは秋子という女一人になった。

この女は独身で、大きな屋敷をもてあまし、急に心細くなってしまうたらしい。私はそれまで女学校の寮に入れられていたのだが、そこを出て、青野家の屋敷から毎日通学するようになった。一家の一員とはまだ言えないが、とうとう屋根の下までもぐりこんだわけだった。

ある日、女学校から帰ってくると、メイドがほっとした顔で私を迎えて、すぐに言った。

「お客さまがみえていますよ」

メイドは中年の婦人だったが、私が帰ってくるまでいかにも不安で、心細く感じていた様子だった。

「私に？」

「欧州からいらした方ですよ。私は外国語は知らないし、この人も片言なのでよくわからなかったのですが、冬子さんがロンドンへいらっしゃったときの知人と言っているようでした」

「ふうん」

帽子とコートを脱ぎ、彼女に預けて私は廊下を歩き始めた。奥の客間へ向かったのだ。ここは本当に大きな屋敷で、部屋がいくつもあって廊下も長く、すべてがびかびかに磨かれていた。

青野家は江戸時代から続く家で、特に明治に入ってから、生糸きいとの売買で富をきずいてきた。その商売も先代が死去したときに閉じてしまっていたが、今でも金持ちであることに変わりはない。

客というのは白人の男だった。すべての柱をうるしで塗り、きらきら光る貝殻細工かいがらさいくで要所要所をかざり、青い畳を敷きつめた中で座布団に座って、あぐらをかいていたらしいが、私の足音が聞こえてきたので、あわてて正座しなおしたという感じだった。こげ茶色の背広を着て、いかにも窮屈きふくくつそうにしている。私はふすまを開けて、部屋の中へ入っていった。

大きな身体を座布団の上にはみ出させて、ロングが正座をしてこちらを見上げているところというのは、飼い主に散々しかられて、しょんぼりしてしまった犬を思わせるところがあつて、私は思わず笑い出しそうになった。あわてて口を押さえたが、少し声を立ててしまった。ロングはそれに気づき、不愉快そうな顔をして、鼻にしわを寄せた。

だが本当に、それは噴き出してしまいそうな眺めだったのだ。色黒の雄牛が洋服を着て、所在なさにちんまりと座っている。自分でもそのことに気づいたのだろうが、ロングがにやりと笑った。

「驚かしちまったか？」

「そうでもないわ」

ふすまが開く音が聞こえたので振り返ると、メイドがひどく遠慮そうな顔つきで、私のための茶を持って入ってきたところだった。

「伯母様がお帰りになったら、すぐにここへお通ししてね」私はメ

イドに言った。血縁はなかったが、秋子のことを私は伯母と呼んでいた。

「はい、お嬢様」

「こんなところで何をやっているの？」メイドが出ていったあと、自分で座布団を出して座って、私は言った。

「オレだつて来たくはなかったさ。つまらねえ仕事さね」ロングはふてくされた顔をした。「頼みたいことがあるから来たのさ。おまえにじゃなくて、伯母上にだがな」

「へえ」

「だが通訳が要る。伯母上は英語は話すまい？」

「そうね」

部屋の外から足音が聞こえてきたのは、そのときだった。ふすまの向こうから、伯母とメイドが話す声も低く聞こえた。

すぐにふすまが開き、伯母が姿を見せた。いつもと同じように海軍の制服姿だ。ほとんど黒といってよいような紺色の上着とズボンだ。女の職業軍人というのはこの時代には珍しかったし、士官だともっと珍しかった。中佐となると、海軍でも彼女一人だけだったと思う。

伯母の姿を見て、ロングがため息のような声を上げたのを私は聞き逃さなかった。はじめて伯母に会う人は、例外なくこのような反応をした。伯母は帽子を脱ぎ、わきの下にはさんでいたので、つや

のある黒い髪が見えた。髪先は後ろでたばねて、きちんとまとめている。

「どうかそのままです」ロングはあわてて立ち上がろうとしたが、伯母は軽く手を上げて制した。

「青野です」背筋を伸ばし、帽子をかぶりなおし、伯母は正式な敬礼をした。ロングは照れたように笑って、あやふやでいい加減な敬礼を返していた。

居心地が悪そうに、ロングは座り直した。伯母も座った。メイドが茶をもう一つ持ってきて、伯母の前に置いた。メイドが出ていくと、ロングが話しはじめた。私は通訳をした。

「オレたちは、どうしてもあんたの協力が必要なんだ。青野中佐」

伯母は何も言わずにロングを見つめていた。ロングが続けた。

「英国政府は、昨日横須賀に入港したある船に強い関心を持っている」

伯母がため息をつくのが聞こえた。「正確には、あの船の積み荷に関心があるわけですね」

「ああ」

「よくご存じですね」伯母は身体力が抜けてしまった様子だった。今までそんなところは見たこともなかったので、私は少し驚いていた。伯母は続けた。「でも、なぜあなたが日本に来ているのです？ もう海軍は退役なさったのでしょうか？」

ロングは少し首をかしげて、唇をゆがめた。

「オレだって、好きで極東くんたりまで来たわけじゃねえさ。親父に勘当かんとうされそうになってさ。兄貴がとりなしてくれっていうんだが、交換条件としてこれが出てきた。この件を首尾しゅびよく解決することができる、オレは遺産相続人にとどまることができる」

「大変ですね」

「まあな」

「それって、どういう積荷なの？」我慢できなくなつて、私は横から口をはさんでしまった。日本語のわからないロングは不思議そうな顔をした。

「蒸気タービンですよ」伯母が小さな声で答えた。

「え？」

『タービン』という言葉が聞き取れたらしい。ロングが言った。
「日本海軍もなかなかの策士さくしだわな。詳細は話せねえが、今度こそ密輸に成功したわけだ。それが昨日、横須賀港に到着したということさ」

伯母はもう一度ため息をついた。「高性能の船を作るには、どうしても必要なのです。それであなたは、何を知りたいのですか？」

ロングの表情がけわしくなった。

「港に陸揚げりくあげした後の輸送方法が知りたい。なんとか穩便おんびんに取り返したいのな」

「でもこの密輸には、私はまったく関わっていないのですよ。それにそもそも、どうしてあなたに協力しなくてはならないのです？」

伯母はロングをまっすぐに見つめていた。英国人であろうが誰であろうが、必要があれば戦い、殺すこともいとわない戦士のような視線だと私は思った。言葉づかいはやわらかくても、やはり伯母の内部には、ああいうただけしい女が潜んでいたのだ。

だがロングも大したもので、伯母を見つめかえして手招きをし、座布団の上で身体を乗り出させた。伯母の耳に顔を近づけ、ロングの口が動くのが見えて、何かをささやいたようだった。

何を言ったのか、私には聞こえなかった。何語だったのかもわからない。だがロングでも短い日本語なら覚えることができるだろうし、伯母も英語が一言もわからないわけではない。

ロングの口が閉じ、耳もとから離れていったときには、もう伯母は真っ青になっていた。息もできないでいる様子だ。ロングを見つめ返し、「本気ですか？」と言った。

ロングは無表情にうなずいた。

「なんてこと」という伯母の小さな独り言が聞こえてきた。

伯母はため息をついた。「そういうことであれば、私は協力するほかありません。何ができるかわかりませんが、努力はしましょう」

「そうしてくれると助かるよ」ロングは答えた。

ロングはすぐに帰っていった。私は玄関まで見送ったが、伯母は

部屋にこもったまま、顔も見せなかった。屋敷の近所には外国船員向けのホテルがあつて、自分はそこに滞在しているとだけ言つて、ロングは姿を消した。

数日後、私が学校から帰つてくると、珍しくもう伯母は帰宅していた。私を部屋へ呼び、ロングへ伝えるべき伝言を私に持たせた。約束の時間が迫っていたので、私はすぐに出かけた。

ロングは毎日夕方、同じ時刻に近所の公園を散歩することになっていた。だからその時刻に公園へ行けば、誰にも怪しまれずにロングと顔を合わせることができるわけだった。この町は港にも近く、外国人の姿も珍しくはなかった。

公園は、長い坂道を登つていった先にあつた。何ヘクターもある大きな公園で、家族連れが散歩したり、カップルがデートをしたりする場所だったが、寒い日だったから、このときは誰もいなかった。私は駆けていき、公園の中へ入つていった。

ロングはすぐに見つかった。公園の中央に池があり、そこで水鳥を眺めていた。ロングもすぐに気づいて、私に近寄つてきた。コートのポケットに手をつ込み、身体を左右に大きく傾けながら、いかにも暇をもてあましているという風情だ。私から数メートルのところまで来て、ベンチにドスンと腰かけた。私に背中を向けたまま、話しかけてきた。

「イギリスの冬は寒くて好かんが、日本の冬も女神の微笑みのよう
とは言えんな」

「蒸気タービンの件なの」私はささやきかけた。ロングとは違う方向を向き、空を眺めているふりをした。

「余計なことはいいい。要点だけ言え」

タバコを吸いすぎてでもいるのか、ロングの声はひどくガラガラして、聞き取りにくかった。機嫌も悪そうだった。

自分の顔だからもちろん見えなかったが、私は唇をゆがめていたかもしれない。「9884号という貨車に積まれて、貨物列車で運び出される予定なの。積み込む日付まではわからない。だけど、四月一日以降になるのは確実だろうって」

「それだけか？」

「ええ、ご不満？」

「そんなことはねえ。それだけで十分さ」

私はくるりときびすを返し、公園から出てきた。ロングはその後ベンチにとどまっていたのかもしれないが、ふり向かなかったの
で私にはわからない。

ロングに会うことはもう二度とないだろうと私は思っていた。すぐに屋敷に戻って、ロングには伝えたと伯母に伝えたが、それ以後は伯母も私も、ロングや蒸気タービンのことを話題にすることはなかった。本当の話、私はもうロングの顔など見たいとも思わなかった。だが、望みなどかなわないのが人の世の常なのだろう。その数日後のことだ。

学校を終え、私は家へ帰ろうとしていた。駅のプラットホームで

列車を待っていた。目の前の線路を貨物列車が発車しようとしていることには気づいていたが、特に關心などなかった。黒く塗られた何十両かの貨車の列に過ぎない。あの中に何が積まれていようと、私の知ったことではない。

ところがその私の目の前に、不意にロングが現れたのだ。

ロングも同じプラットホームにいたらしかったが、私は気づいてはいなかった。あちらは気がついていたらしい。私めがけて駆けてきて、貨物列車を指さし、大きな声で言ったのだ。

「おいフィッシュ、あれは一体どういうことだ？」

私には意味がわからなかった。「なんなの？」

「あの貨車には9884と書いてあるんじゃないか？」

私は貨物列車を見た。そして気がついた。どうということのない普通の四角い貨車だった。他の貨車と同じように真っ黒に塗られているが、車体の横の部分には、たしかに白いペンキで9884と書いてある。

「まだ四月にはなっていないわ」

だが私の言葉は、ロングの耳には入らなかったかもしれない。ひどくくやしそうな声を出した。

「あれは横須賀から来た列車だ。やつらめ、予定を早めやがったんだ」

貨物列車は、もう駆け足ぐらいにまで加速して、駅を離れていき

つつあった。長い列車で、9884号貨車は前から三分の一ぐらいの場所に連結されている。先頭にいる機関車は信号機を越えて、もう本線に乗り出している。だが私には、どうでもよいことと思えた。

「まあ、がんばってよ」

だがロングは答えなかった。不意に私の手首をつかみ、強く引いたのだ。私は引きずり倒されてしまいそうになった。あわてて足を踏ん張ってバランスを取り戻したが、すぐにまた引きずられて、ロングと一緒にプラットフォームの上を走り始めることになった。

「何をするの？」

「ついて来い。通訳が要るかもしれねえ」

それが、ロングがしてくれた唯一の説明だった。だから一分後には、私は家とは反対方向へ向かう列車の中にいた。その列車がちょうど発車するところだったのだ。動き出しかけた列車のドアを開け、ロングは私を押し込んだ。すぐに自分も飛び乗ってきた。

「人さらい！」ロングの手を振り解き、私はにらみつけてやった。だが列車は、もう駅を出てしまっている。どうあっても、次の駅までは引っ張っていかれることになる。

ロングは何も言わなかった。窓越しに外を気にしている。このあたりには四本の線路があり、北側の二本を旅客列車が、南側の二本を貨物列車が使っていた。ロングは、この列車がさっきの貨物列車に追いつくことができるかどうかを気にしていたのだろうが、私には本当にどうでもよいことだった。

「私は次の駅で降りるわよ。邪魔をしたら車掌を呼ぶからね。警察に突き出して、イギリスへ送り返してやる」

「そうなれば」ちらりと私の顔を見、また窓の外に視線を戻して、ロングは平気な顔で言った。「イギリスは蒸気タービンの件を公表して、国際問題化させるだけだ。タービンが9884号貨車に積まれたことをどうやってオレがかぎつけたのか、きっと日本政府は知りたがるだろうよ」

これはもう完全に脅迫だった。だが私にも、これには逆らうことはできないとすぐにわかった。

私の表情の変化に気がついたのだろう。ロングはうれしそうに笑った。「暇があればだが、伯母上にあてて電報を打たせてやるよ。不必要に心配させることはないからな」

もう私は何も言う気にならなかった。二時間後、すっかり日が暮れてしまっていたが、私とロングはある田舎の駅で列車を降りた。谷間にある小さな駅で、短いプラットホームとちやちな建物があるだけで、駅員は一人しかいなかった。駅前から細い道が森の中へ向かって伸びているが、ぐるりと見回しても、家は一軒も見えなかった。きつと山道を何百メートルが行った先に村があるのだろう。

私とロングは列車から降りて、道を歩いていくふりをして、ぐるりと大回りをして、茂みをかきわけてまた駅まで戻ってきた。あたりは真っ暗だが、ポツンポツンという客たちや駅員から見られないように気をつけていた。線路のすぐわきに小さな小屋があったので、その影で待つことにした。

私はそばに積んであった丸太に腰かけたが、ロングは立ったまま、

駅の建物から差し込んでくる弱い光にかざしてときどき懐中時計を眺め、何度もまわりを見回して、誰にも見られていないか確かめていた。

九時過ぎになって、とうとう貨物列車が姿を見せた。私たちは、何とか追い越すことに成功していたのだ。真つ暗な中、遠くからヘッドライトだけがざらりと光っている。シューシューいいながら煙をはいている。ブレーキをかける音が聞こえた。スピードを落とすいき、とうとう停車した。

機関車の運転台に人影が二つ見えた。機関士と機関助士だ。ここからでは声は聞こえないが、気楽そうにおしゃべりをしている。駅員もプラットフォームに出てきて、そのおしゃべりに加わった。ゆっくりと歩いて、三人は駅の建物の中へ入っていった。

「いい気なものね」私は言った。

「そりやそうだろ」ロングが小さな声で答えた。「発車まで一時間もあるのだからな。この駅で、後から来る急行列車に道を譲るんだ。ほれ、もう一人お仲間が来たぞ」

車掌室から車掌も出てきて、駅の建物へ向かうのが見えた。ガラガラと戸を開けて、中へ入っていった。これで貨物列車は無人になったわけだ。

「行くぜ」

雑草をかき分けて線路に出て、貨物列車にそって歩いていった。貨車の黒い車体がいくつも並んでいる。足元は砂利だから歩きにくい。

「例の貨車はどのあたりだったっけ？」私は小さな声で言った。

「前から三分の一ぐらいのところだった。もう少し歩かなきゃな」

歩き続け、私たちは9884号貨車を見つけることができた。立ち止まって私が車体を見上げ始めたときには、もうロングは身体をかがめ、前後を見回していた。

「似た形の貨車は近くにないか？」ロングの声が聞こえた。

「五つぐらい後ろにあるのがそっくりよ」

「そいつの荷札を抜き取ってきてくれ」

「どうするの？」

「いいから行ってこい」

私はその貨車のところへ行き、車体の側面に貼り付けてある荷札に手を伸ばした。分厚いボール紙でできていて、金属製のホルダーに差し込んである。荷主の名と目的地が書き込んである。鉄道員たちはこれを見ながら、貨車を走らせるルートを決めるのだった。

私はその荷札を持ち、ロングのところへ戻った。その間にロングも、9884号貨車の荷札を抜き取っていた。私たちは荷札を交換し、再び貨車に取り付けた。二つの貨車の荷札が張り替えられたわけだった。

ロングは手帳を取り出し、荷札の内容をメモしはじめた。ロング

は私に、ひょいと手帳のページを見せてくれた。

「駅名はこの漢字で合ってるか？」

私は目をこらした。声は出さなかったが、かすかに笑ってしまった。

「ものすごくへたな字だけど、読めなくはないわ」

「それはよかった」

「それをどうするの？」

「これを伝言して、オレの仕事は終わりさ。あとは諜報部ちやうほうぶの連中にまかせる。この駅に先回りして、この貨車をおさえるだろうよ」

ロングがイギリスへ帰っていった数日後、私はとうとう決心を固めて、海軍にあてて手紙を書いた。あて先は、横須賀の司令部としておいた。

伯母が所属している部署だ。だがこの手紙は、別の誰かが開封するだろう。わざと伯母あてにはしなかったのだ。差出人も匿名にしておいたが、中身は、伯母がイギリス人たちに情報を漏らし、それゆえ蒸気タービンは取り返されてしまったのだと告発する内容だった。

もちろん伯母は逮捕され、軍法会議にかけられるだろう。まず死刑はまぬがれまい。もしかしたら私まで罪に問われることになるかもしれないが、そのことは考えないことにしていた。青野家に復讐するためであれば、その程度の危険をおかすのはやむをえない。

だが私は十四歳だったのだ。海軍の連中が、本気で私の責任を追及するとは思えなかった。きつと連中は、私は何も知らずにただ伯母の言うとおりに行動したのだと解釈してくれるだろう。

登校する途中で郵便ポストに立ち寄り、私はその手紙を投函とつかんした。さつと歩き始め、駅へと急いだ。

私の学校には専任の音楽教師がいて、佐藤という女の教師だったが、希望する生徒には個人的にピアノを教えてくれたので、私も習っていた。

週に一度、放課後私は音楽室に彼女を訪ねて、ピアノの前に座った。だからこの日もいつものように音楽室へ向かったのだが、胸の動悸おどけをおさえることができなかった。あの手紙はもうどこまで行っただろう。そろそろ海軍に届けられるころだろうか。

この日の私は練習に集中することができず、細かなミスをいくつも積み重ねた。自分でも嫌になってしまったが、佐藤は嫌な顔一つせず、何回も直してくれた。

この日の練習は、とても長く感じられた。だがそれもついに終わり、私は楽譜を持って立ち上がろうとした。

「先日は、母の葬儀に来てくれてうれしかったわ」突然、佐藤が言った。

佐藤は独身で、ずっと母親と一緒に暮らしていた。だがその母親が二週間ほど前に亡くなり、生徒たちも集まって、家で葬儀が行われた。彼女の家は下町にある小さな借家で、黒い瓦を乗せて、ずん

ぐりと同じ形をした家が何十軒も並んでいる中であつた。どうにも殺風景な場所だったが、彼女の家の小さな庭には木や草が植えてあり、まわりの家々よりは少しは明るい感じがした。

「はい」私は小さな声で答えた。

「あなたの顔を見ているとね」自分も楽譜をかたづけながら、佐藤が話し始めた。「あの日のことを思い出すわ。母は助産婦をしていたの。家の中でたくさんのお赤ちゃんを取り上げたのよ。十数年前のことだけれど、白人とのハーフのお赤ちゃんを取り上げたこともあった。とてもきれいな女の子だったわ。あなたと同じような青い目をしてね。髪も同じように金色がかったいた」

「ハーフ？」

「ええ。私には姉がいてね。そのころ姉はあるお屋敷に奉公ほうこうしていたのだけれど、そこのお嬢さんが外国人との間に赤ちゃんを身みごもつてね。だけど正式には結婚できない事情があつて、だから姉はお嬢さんを連れて、母のところへ来たの。そして出産して、赤ちゃんは里子やうしに出されたらしいわ」

「里子？」

「私もよくは知らないのよ。母と姉が話すのを断片的に耳にしながら。なんでも後年、お嬢さんはお屋敷の人たちをだまして、まったく身寄りのない気の毒な孤児だからという口実で、お金を出してどこかの女学校へ行かせてあげているということだったわ」

私は胸がときどきしはじめた。心臓が口から飛び出してしまいそうな気がした。まさか。しかし、どうすればそれを確かめることが

できるだろう。思い違いであってくれればいいのだが。

私は制服の胸に手を入れ、細いクサリの先につけられた小さなペンダントを取り出した。常に胸にかけているもので、小さな写真を入れて、好きなときにフタを開いて見ることができるようになっていた。

本来なら恋人たちが使うものだろうが、私にはそんなものはいなかった。驚いた顔をしている佐藤の前で私はペンダントのふたを開け、中にある写真を見せた。すぐに佐藤の表情が大きく変わった。「姉の写真を、どうしてあなたが持っているの？」

さようならも言わずに、私はカバンをひつつかんで、音楽室を走り出た。列車に飛び乗っても、駅に到着するまでがとても長く感じられた。屋敷に帰っても、伯母はまだ帰宅してはいなかったが、待っている時間はなかった。すぐに駅へ駆け戻った。

ときどきだったが、私は駅で伯母と出くわすことがあった。今日も伯母は午後五時四十五分の列車に乗って帰ってくるのではないかと私は思いついた。

五時四十分には、私はプラットフォームに出て待っていた。プラットフォームのはしで首を長く伸ばして、横須賀の方向を眺めていると、やっと汽車の姿が見えてきた。伯母がいつも二等車に乗っていることを知っていたので、茶色い車体に青い帯を引いた客車を目指して、私は駆けていった。

ギギッと音を立てて止まるのもどかしく、私はドアに近寄った。二等車の出入口は二つあった。どちらから降りてくるのかわからないので、私はきよろきよろした。向こうのドアのところに海軍の制

服が見えた。私は駆けていった。

足音に気づいて伯母は顔を上げ、驚いたような顔をした。振り返って、おつきの若い当番兵からカバンを受け取りながらだったが、「どうしたの？」と言った。

汽笛が聞こえ、汽車が動き始めた。伯母は軽く手を上げて私の口を閉じさせ、再び振り返って、当番兵に向かって敬礼をした。デッキに立ったまま、当番兵も敬礼を返した。指先にまで力を込め、一瞬でピンと石像のように硬くなった。

汽車が行ってしまうと、プラットホームの上は急にひとけがなくなり、ひっそりとしてしまった。涙が出てきそうな気がしたが、なんとか我慢することができた。私は早口に言った。

「伯母さんは、本当は私のお母さんなのね」

「何を言い出すのです？」伯母は微笑もうとした。

「佐藤先生から聞いたの。佐藤先生は、ロンドンでしばらく首になった佐藤の妹だったの」

私は、音楽室で聞かされたことを話し始めた。伯母は黙って聞いていたが、話し終えたとき、ほおをそつとなでてくれた。

「おまえはときどき、お父さんとそっくりな表情をすることがあるですよ」

私には、まだ話さなくてはならないことがあった。私は、今朝投函した手紙のことを話し始めた。見る見るうちに、伯母の顔は紙のように白くなっていった。

「それは本当のことなのですね？」最後に伯母は言った。

「ええ」

伯母は目を閉じ、私の肩に軽く手を置いた。何かを考えているようだったが、とうとう目を開いた。

「冬子、よく聞きなさい」

「はい」顔を上げ、私は伯母をまっすぐに見つめた。

私と伯母はすぐに別れた。伯母は次の汽車に乗って横須賀へ引き返したが、私は下り列車に乗って、西へ向かうことになった。

すっかり日が暮れてしまっていたが、普通列車に乗り、走り続けた。途中の大きな駅で何分間か停車したとき、プラットホームに降りて時刻表を買ってきた。

列車がまた動き出し、私は時刻表を調べ始めた。車内はすいていたが、嫌な感じがなかったわけではない。少し前から気がついていたのだが、デッキに若い男が一人、ずっと立ったままにいるのだ。空いているイスはいくらでもあるのに、なぜか座らないのだ。

目のすみで観察していたのだが、気づかれないようにしているつもりなのだろうが、男は何度もちらちらと私に視線を向けていた。私を尾行するように命じられているのだろうが、うまいやり方ではないと思えた。いくら海軍の学校でも、尾行のやり方までは教えないのだろう。

夜行列車だったから、夜が明けてもまだ走り続けていた。すべての駅に停車しながら、ひどくゆっくりとだったが、もう名古屋はすぎ、岐阜県に入っていた。

あの男は、私の居場所をどうやって上司に連絡しているのだろうか。車掌や駅員が便宜べんぎを図り、電報を打ってやっているのだろうか。

だが、それはありそうもない気がした。新聞ざたになった後はと

もかく、今はまだこの事件は極秘扱いだろう。すると、私がこの列車に乗っていることは、この世であの男一人しか知らないということになる。

朝早く、列車が関が原をすぎたばかりのころだったが、私は突然立ち上がり、ある駅で下車した。名前も知らないし、急行列車も止まらないような小さな駅だったのだが、駅前に広がっている町も同じように小さかった。旅館が一つと食堂が一つ。少し向こうに小さな酒屋が見えている。

駅を出てもきよろきよろなどせず、いかにもよく知った町であるかのように、私はすたすたと歩き始めた。

街道を外れていたから江戸時代にも大して繁栄はせず、今になっても小さな駅が一つあるきりというしみったれた町だったが、少し先に馬車屋があるのが目についた。小さな建物の扉が半分開いていて、小型の馬車が一台、おしりを見せている。

のぞきこむと男がいて、わらたばで馬の背中をなでてやっていたが、話しかけるとすぐに用意をしてくれた。赤ら顔で、いかにも酒をよくやるという感じの中年男で、馬をつなぎ、馬車を通りに引き出して、私のためにドアを開けてくれた。

「どこまで行きますか？」見慣れない制服姿に不審そうな顔をしているようだったが、御者は言った。

「東谷までお願いします」駅前の案内図を見て、適当に覚えておいた地名だった。ここから二キロばかりある。

「はい」

馬車は走り始めた。田舎道だから石畳などなく、ぎしぎしゴトゴト揺れる。もう大丈夫だろうと思える距離まで来て、私はちらりと振り返ったのだが、あの男はまだ駅前に立って、こちらを見ていた。

「ねえ御者さん」窓から身体を乗り出して、私は話しかけた。「この町には、他には馬車はいないのかしら？」

「どうどう」御者は馬に声をかけて、歩調を少しゆるめさせ、たづなをピシッと鳴らして答えた。「へえ、この馬車が一台あるきりですあ」

「隣町には？」

「あることはありますが、何キロも先ですよ。どうかなすったんですか？」

「こんど十人ばかりの集まりがあつて、馬車を借りようかと思うのだけど、この馬車一台では運びきれないわね」

「そういうことなら、あつしが手配できますよ。そのときにはおっしゃって下さいまし」

「ええ、ありがとう」

窓から顔を引っ込め、私はゆったりとイスに座りなおした。思わず微笑が浮かぶのをおさえることができなかった。あの尾行者には、私のあとを追う方法はない。

「御者さん」馬車が町を完全に抜け出たとき、私は再び話しかけた。

「はい」

「急に用事を思い出したの。東谷はやめにして、長浜へ行ったださるかしら？」

「へえ、よろしゅうございます」

長浜は駅のある町だった。だがさつきとはまったく別の路線だから、まさかあの男も気がつかないだろう。

馬車は田や畑の間を走り続けた。平野を抜け、山の中へ入っていった。道がくねくね曲がって、上り坂になる。窓の外も、木や草のしげみになる。ときどき崖のそばを通る。たまに川があつて、短い橋を渡る。一時間ほど走って目的地に着いた。駅の前で、御者は馬車を止めた。

「へえ、着きました」

「ありがとう」

ドアを開けて馬車から降り、私はサイフを取り出して料金を払った。御者を見つめ、にっこりして、もう一枚余分に紙幣を渡した。

「これは？」御者はひどく驚いた顔をした。

「帰りに一杯やってくださいな」

「こりゃあ、どうもすみません」

御者が馬車に乗り込み、ムチを振るってどこかへ見えなくなるの

を待つてから、私は駅の中へ入っていった。

改札口でキップを買いながら、私は満足していた。あの御者は、いかにも酒好きな感じのする男だった。きつと今ごろは、どこかの店で一本つけ始めているだろう。車庫へ帰るのは何時間も先のことに違いない。私をどこまで乗せたのかを尾行者が知るのは、その後のことだ。

次の列車をつかまえ、私はさらに西へ進んでいった。

日が暮れる少し前には、私は神戸の町に入っていた。すぐに町の詳しい地図を買い、少し洋服も買って着替えた。

港のそばの小さな旅館に宿を取り、二日間待った。その日がやってきて、私は宿を引き払い、歩き始めた。

伯母とは、港のある地点で待ち合わせていた。そこから近いということで宿を選んだのだが、地図で見ても、歩いて三十分からずに行き着くことができそうに思えた。だが私の考えは甘かったようだ。

私が歩き始めたのは、夕方五時ごろのことだった。伯母とは六時ちようどに待ち合わせていた。だが不意に、私は前方にいる人影に気づいたのだ。

薄暗くて見えにくかったが、私はとつさに物陰に隠れた。首を伸ばして、見つからないようにそつとのぞき込んだ。ここからは五十メートルぐらい先だ。通りの中央に男ばかりが数人いて、いかにもぬけ目のない感じで、見回しながら立っているのだ。

背筋がぴんと伸びていて、どう見ても港の作業員という感じではない。私はため息をついた。私を見失っても、先回りする知恵は彼らにもあつたわけだ。

地図を取り出して眺めたが、男たちがいるのは埠頭のちようど根元に当たる場所で、そこを通らないと約束の場所へ行くことはできなかった。何か方法を考えなくてはならなかった。私はきびすを返し、そつと町のほうへ戻り始めた。

私はまわりを見回した。港と市街の間に広がっている地帯だ。工場と一般の住宅が、ゴチャゴチャに混ざって建っている。それらのむこうには、造船所の大きなクレーンがいくつか立っているのがシルエツトで見えている。こういう場合、ロングならどうやって切り抜けるだろうと私は考え始めた。

私は立ち止まり、自分の身体を見回した。なんということのない服装だ。白いブラウスの上に黒い上着を着、ズック靴と白いズボンを身につけている。動きやすさだけで選んだ服装だ。手に持っているカバンは大きくふくらんでいるが、入っているのは学校の制服だけだ。このズボンの上に制服を着たら、看護婦のように見えるだろうかと私は考え始めた。

しかし、いつまで考えていても始まらなかった。私は上着を脱ぎ、ブラウスとズボンの上から制服を身につけた。真っ白なワンピースだから、校章をはずしてしまうと、看護婦に見えなくもないと期待するしかなかった。それにもうすぐ真っ暗になる。思いついて、白いハンカチを頭に巻いて、看護婦の帽子のように見せることにした。

まわりを見回し、そばのドブに古いバケツが落ちているのを見つけた。靴と指先をぬらして拾い上げ、何回かすすいで泥を落とした。

ひどくさび付いているが、穴は開いていないようだった。

それを手に持ち、私は歩いていった。老人に出会ったのは、その直後のことだった。

七十歳は軽くすぎているような男で、しわだらけの顔をして、背中が前のめりにきつく曲がっている。大きなガラスびんを手にもち、戸をがらりと開けて道路に出てきたところだった。ビンの中には白い液体が入っている。歩いていく方向から見て、ビンの中身をドブに捨てようとしているようだ。

「おじいさん、何をしているの？」

まだ耳は遠くないようで、私が話しかけると、老人は驚いたように顔を上げた。

「何かね？」

「その牛乳をどうするの？」私はもう、ビンの中身は牛乳だろうと見当をつけていた。

「腐らせてしまったのでな。捨てるのじゃよ」歯のぬけた歯ぐきを見せて、老人はにっと笑った。

「ちょうどよかったわ」私は微笑みかけた。「私に下さらないかしら？」

「何にするんだね？」老人はビンを高く持ち上げ、私に見せた。「腐っておるんじゃないよ」

「私は猫を飼ってるんだけどね。名前はブラック大魔王というの。」

でも変な猫だね。腐った牛乳しか飲んでくれないのよ」

「どこにそんな猫がおるもんかね」

「それがいるのだから困ったものよ。ほどよく腐った牛乳をやらな
いと、ご機嫌が悪いの。私は引つかかれてしまうのよ」

「それはまあ、捨てるものじゃから、差し上げておかまわんが」

「じゃあお願い」

私はバケツを差し出した。老人はまだ不審そうな顔をしていたが、
ビンの中身をバケツにあげてくれた。とたんに、目が痛くなるよう
な匂いが襲いかかってきた。少なくとも数日は忘れられていたもの
らしい。ところどころ練り^ね歯磨^{はみが}きのように固くなっている。

「本当にこれでいいのかね？」老人は疑わしそくに私を見た。

「ええ。これでブラック様のご満足は疑いなしだわ」

老人がまた何か言い出す前に、私はさつさと歩き始めた。匂いが
強いので、バケツはできるだけ身体から離して持つことにした。す
ぐにさっきの場所まで戻ってきた。

もちろん男たちはまだいた。私はハンカチをもう一枚取り出し、
顔の前にマスクのようにかぶった。目だけはどうしても出すことにな
るが、暗い中で瞳の色に気づかないでいてくれることを祈るしか
なかった。

奇妙な姿で私が近づいてくることには、彼らはもちろん何十メー

トルも前から気づいていた。五人いて全員が私服姿だが、それでもいかにも軍人ふうな感じがする。

「止まれ」近くまで行くと、すぐに話しかけてきた。私は言われたとおりにした。

「どこへ行く？ それはなんだ？」背の高い男が言った。

「消毒薬よ」私は答えた。

「消毒薬？」別の一人がかがんで、バケツに顔を近づけた。とたんに声を上げて、数歩逃げた。「ひどい匂いだな」

「良薬は口に苦しっていうわよ」

「その消毒薬をどうする気だ？」

「この先に運河があつて」私は軽く指さした。「水がよんだ場所だから、ボウフラが大量に発生していると通報があつたの。だから保健所から持ってきたのよ」

「おまえは保健所の人間か？ なぜ看護婦の服を着ている？」

「これは保健所の制服よ。わからない？」

「制服のある保健所など聞いたこともないな」男たちは不審な顔をした。「身分を証明できるものを持っているか？」

自分でも驚いたが、私は声を震わせることさえなかった。「職場に置いてきたわ。あなただったら、ボウフラ退治に出るのにそうい

うものを持つてくる？　ご不審なら、問い合わせてもらってもいいわよ」

「しかし保健所が、なぜこんな夕方に仕事をする？　明日ではいいんのか？」

「明日でもいいわよ。だけど夜のうちにボウフラがかえって、明日あたり大量の力が発生するわ。体中食われても知らないわよ」

「保健所に問い合わせをする。少し待て」

「まあまあ」別の一人が言った。「匂いがかなわん。行かせてやろうじゃないか。鼻が曲がってしまいそうだ」

私は通ることを許された。バケツをかかえ、歩き続けた。男たちからは見えないところまで行き、牛乳はバケツごと海に捨て、せいせいして深呼吸をした。制服を脱ぎ、黒い上着を着て、埠頭の先めざして歩いていった。

伯母とはすぐに出会うことができた。大きな木箱の影に隠れていたが、足音を聞きつけて姿を見せたのだ。

「遅かったのね。心配していたのよ」伯母は、すぐに私を連れて歩き始めた。

「埠頭の入口に見張りがいて、少し芝居をしなくてはならなかったの」

「そうなの。でも来れてよかったわ」

伯母は私を、岸壁につないである小さなボートのところへ連れていった。波を受けて、ゆっくりと揺れている。

「乗りなさい」

私は言われた通りにした。伯母も乗り込んできて、すぐにロープをほどいた。伯母はオールをこぎ始めた。

船べりにつかまったまま、私は神戸の町を眺めていた。もう真つ暗で、市街の明かりが黒い山を背景にして浮かび上がっている。空では星が光り始めている。

「冬子、これを腕にはめていなさい」

伯母はポケットに手を入れて、何かを取り出した。手渡されてわかったのだが、銀色に光る本物の手錠だった。

「どうして？」

「すぐにおはめ」オールをこぎ続けているせいで、伯母は息を切らせはじめている。少しの間迷ったが、言われたとおりにすることにした。ここまで来てしまつては、逆らつても仕方がない。

「もうすぐ船に着きます」何度か後ろを振り返りながら、伯母が言った。すでにボートは陸地を何百メートルも離れてしまつていて、行く手には黒々とした船のシルエットが浮かび上がり始めている。イカリを下ろしているのも見える。暗すぎて細かい部分までは見えないが、軍艦のように思えた。

ボートはその船に近づいていった。確かに軍艦ではあるが、戦艦と呼べるほど大きな船ではないようだった。へさきの形がナイフの

ようにスマートだから、スピードは出そうだ。

甲板からは鉄の階段のようなものが下ろされていて、伯母はそれにボートをつけた。水兵が待ち構えていて、ボートのロープを取り、階段にゆわえつけた。

「中佐殿、お一人で大丈夫でしたか？」

男がもう一人いて、伯母に向かって、きりつと敬礼をした。あとでわかったことだが、この船の副長だった。オールから手を離し、伯母も敬礼を返した。

「大丈夫だ。手錠をかけてある」

「ご苦勞様です」

「鈴木のこととは残念だな」伯母は立ち上がり、手すりをつかんで、鉄の階段にひよいと乗り移った。

「鬼のカクランというやつでしょう。すぐに退院できるこのことでした」

「そうだな。殺しても死ぬようなやつじゃない」

「はい、中佐殿」

「乗組員たちは、私が臨時の艦長になることを知っているのか？」

副長はうれしそうに笑った。「みな楽しみにしております」

「私はきつい女だぞ」

「なんといいいますか、お手並み拝見てなはいけんという気分なのだろうと思います」

「そうか」

「歓迎いたします」

伯母は私を無表情に振り返った。「この娘を船室へ入れておけ」

副長は目を丸くした。

「これが国外追放にする例のロシア娘ですか？ 急な話なのでまどいましたよ。船の準備が間に合うかどうか、いささか汗をかきました。せめて一日余裕を見て連絡をくれればいいものを」

「外交官どもは身勝手に、自分たちの都合しか考えない。実際に手足となって働く我々のことなど気にもしてくれないさ」

「まったくですな」

「この娘を入れるのに適当な部屋はあるか？」

「それが」副長は少し困った顔をした。「予備の食料庫を片付けさせて、そこにほつり込んでおこうかと思っています」

「そこから出たものはどこに置く？」

「床に転がしておくしかないでしょう」

「それでは歩くのに邪魔だ。艦長室は空いているのだろう？」

「中佐殿がお使いになるのでは？」

「私は使わぬ。その娘は艦長室へ入れておけ。窓をふさぎ、外からカギをかける」

「承知しました」

副長は、ボートから降りるようにと私に合図を送ってきた。こわごわ立ち上がり、私はゆつくりと乗り移った。

「手錠は外してやれ。海の上から逃げ出せるやつはおるまい？」伯母は、副長にひょいとキーを投げた。

私は艦長室に入れられた。鉄の壁で囲まれて、小さな窓が一つあるだけの四角い部屋だが、その窓も今は雨戸のようなものでふさがれている。ちゃちなベッドと机があるだけで、他には何も置けないぐらいせまい。私はベッドに腰かけた。船が動き始めたようだった。エンジンの音が大きくなり、船体が揺れ始めた。

船は走り続け、私が艦長室から出されたのは四十八時間後のことだった。外からカギが開けられ、ドアが開きはじめると、伯母が誰かと話している声が聞こえてきた。

「…まあ、そういうことだ」

私は緊張し、立ち上がった。伯母が入ってきた。背後に副長や水兵たちがいるのも見えた。

「外へ出てもらおう。迎えの船が来たぞ」伯母が言った。

私は男たちを見回した。ひどく怖かった。すくんでしまったようになって、足をのろのろと動かすことしかできなかった。

「早くしろ、のろのろするな」

伯母が私の肩を突き飛ばした。私は床に倒れてしまった。

「そうまでなさらなくとも」副長が手を取って、起こしてくれた。

「ふん」伯母は鼻を鳴らした。

私は甲板の上へ連れていかれた。外は真っ暗だった。すぐ隣に船が一隻見えているほかは、月と星以外に光はない。もちろん陸地の明かりもない。大洋の真ん中のようなのだ。ぴちゃぴちゃと音を立てながら、波は光をはね返している。

「あれか？」伯母が言った。

「はい」副長が答えた。

「でかい船だな」

船尾にはためている旗から、ソビエトのものだということはずぐにわかったが、伯母のいうとおり巨大な船だった。四角い箱をいくつも積み重ねたような背の高い形で、大小の砲があちこちからウニのツノのように突き出している。それに比べると、こちらの船はまるでおもちゃのようだ。今度は副長が鼻を鳴らすのが聞こえた。

「大げさなことですな、たかが小娘一人を引き取りに」

「よく知らんが、共産党の幹部に血縁のある娘だそうだ。ボートが

来るぞ」伯母が言った。

本当にそのとおりで、小型のボートがソビエト艦から降ろされたばかりで、こちらへ向かって走ってくるころだった。

「変ですな」双眼鏡をのぞきながら、副長が言った。「こぎ手の水兵が四人いるだけです。将校の姿が見えません。身柄を引き渡した証拠にサインをもらうようにきつく言われているのですが、どうしましょう？ 外務省へ提出しなくてはならないとかで」

「本当か？ ではサインは、私があちらに乗船して受け取ってこよう。あとあと面倒なことになると困る」

「中佐お一人で大丈夫でしょうか？」

「大丈夫さ。何か起きて、問題が国際化しては困るのはあちらだ」

数分後には、伯母は私を連れてボートに移っていた。護衛をつけようと副長はもう一度言ったが、伯母はこぼんだ。ボートは動き始め、ソビエト艦へと戻っていった。

伯母と私が相手の船に乗り込んでしまつて、ボートまでが甲板に引き上げられてしまうのを見て、副長はひどく驚いたことだろう。それだけではなく、艦尾のソビエト国旗まですると引き降ろされ、あつという間にイギリス国旗に取り替えられてしまったのだ。

双眼鏡を使うのも忘れて、副長は呆然とこちらを見ていた。だが独断で追跡を開始したり、攻撃をかけたりしないだけの分別はあったようだ。イギリス艦は全速力で走り始め、日本艦はすぐに見えなくなった。

イギリス艦の上では、私たちは客のような扱いを受けた。船名はパンプキンといい、航海訓練のためにたまたま香港に立ち寄っていたのだが、伯母から緊急の連絡を受けて、イギリス政府が派遣してくれたのだった。船上で私たちは、武器のある区画にまで立ち入ることはできなかったが、デッキの散歩ぐらいなら自由にさせてもらえた。私はときどき立ち止まり、大きな煙突がもくもくと煙を噴き上げるのを眺めた。

食事は専用の食堂で、士官たちと一緒にとるようになった。伯母は制服姿だったが、私は着替えが少なかったので水兵服を貸してもらい、大きすぎてだぶだぶしていたが、着て歩いていた。私と伯母が食堂へ入っていくと、艦長以下全員が立ち上がって迎えてくれた。イスを引いて私たちを座らせるまで、誰も座らなかった。末席にはなぜかロングもいたが、居心地が悪そうにしている。

食事は、ワインなども出るゆつくりとしたものだった。低い声で話をしながら食べる。私は聞き役にまわることが多かった。もう気づいていたのだが、伯母もかなり英語ができるようだった。「あなたほどではないけれど、以前から外国の技術書を読んだりしたのですよ」と、あるとき伯母は言った。

そんな食事の最中のことだったが、ロングが言った。

「佐藤というのも、ずいぶん気の毒な女だったよな」

「ええ」伯母がうなずいた。「本当に」

「それは誰のことです？」不思議そうな顔をして、艦長が言った。

伯母が答えた。「以前はうちのメイドでした。ある事件があつて、冬子の身代わりにロンドンでしばらく首になりました」

「あなたは、そのことを気の毒だとおっしゃっているのですか？」

「それだけではありません。佐藤は冬子の父親の姉がわりでもあつたのです」

「どういふことです？」艦長は、さらに不思議そうな顔をした。まわりにいる士官たちも、同じような表情をしていた。

「カリバー一族のことはご存知でしょうか？」

「ああ」艦長を含め、数人がうなずいた。「不幸な一族でしたな。2年ばかり前に最後の一人が死んで、とうとう死に絶えたと聞きました」

「カリバーってなに？」私は口をはさんだ。ロングが説明してくれた。

「もともとイギリス北部に住んでいた一族でな。紫ダイヤと呼ばれるダイヤが家宝として伝わっていたのだが、とんでもなくでかいダイヤで、親指の先ぐらいの大きさがあつたそうだ。傷一つない完全なものでな。値段はつけようもない。」

それをめぐって一族の間で血みどろの殺し合いになり、一人の男が命からがら国外へ持ち出した。造船技師の職を見つけ、身元を隠し、妻と息子も連れて日本へやってきた。息子の名はフィリップといったが、その家庭教師として一人の女が雇われた。これが佐藤さ。

佐藤は屋敷に住み込んで、フィリップを弟同然にかわいがって育てた。

フィリップは成人し、父の後を継いで造船技師になった。その造船所で軍艦を建造することになり、監督として、海軍から若い士官が派遣されてきた。珍しくも女の仕官だった」

目を丸くして、私は伯母を振り返った。伯母は何も言わず、下を向いていた。

「それでどうなったのかね？」艦長が言った。ロングが続けた。

「外国へ逃げたからといって、カリバー一族も追跡をあきらめるようなことはしません。日本まで追いかけてきたのです。そしてダイヤを奪おうと屋敷に忍び込んだのですが、運悪くフィリップと鉢合はちあわせになり、フィリップは殺されてしまいました。殺人者は跡も残さず国外へ逃げのびました。しかしここで、奇妙な誤解が生じたのです」

「なんだね？」

「青野家の人々は、青野中佐とフィリップの仲にはもちろん気がついていました。そして気に入らなかったのでしょう。すでに中佐の腹の中には冬子がいたのですが、フィリップと別れるように、中佐に強く迫りました」

「そんなこと、できるわけがありません」伯母は下を向いたまま、小さな声で言った。泣いているのかもしれないと思った。

「フィリップが殺されたのは、ちょうどそういつときだったのです。

フィリップの両親はすでに故人でした。あとに残ったのは、家庭教師だった佐藤一人です。紫ダイヤのことは、佐藤も知らされていなかったのでしょうか。だとすれば、青野家の連中がフィリップを殺したのだと佐藤が誤解し、うらむようになるのも不自然なことではありません。正体を隠し、佐藤はメイドとして青野家にもぐりこんだのです」

「そこで冬子さんが登場するのだね」

「生まれてすぐ、冬子は里子に出されました」

伯母が顔を上げた。「二年前に両親が死んで、邪魔者がいなくなったので、孤児院から引き取り、女学校へ入れました。機会を見てすべてを話し、家を継がせるつもりでいたのです」

艦長がまゆを上げた。「青野中佐、これは単なる好奇心からする質問なのですが、ダイヤはその後どうなったのですか？」

「フィリップから預かり、私が保管していました。こんなものさえなければ両親も異国で死なずにすんだものと、手を触れるのも嫌がっている様子でした。私は銀行の貸し金庫に保管していたのですが、あるとき紛失していることに気がつきました。弟の仕業だと思えました。ダイヤの存在は、弟にしか話していなかったからです。問い詰めてやろうと思ったのですが、弟はすでにロンドンへ向けて旅立った後でした」

「その弟さんというのは、タービンの密輸に関わっていた人ですね」

「そうです」伯母はうなずいた。

食事がすんで、部屋へ帰るために廊下を歩いているときにも、私の胸にはまだあのペンダントがあった。佐藤の写真が入っているものだ。

私は佐藤を深く信用し、その言葉に耳を傾けたのだ。彼女が言うことはすべて信じたといつてもいい。佐藤は私に、父のかたきをつつようにそそのかしたのだ。しばらく首になるときにも、佐藤はさぞかし満足だったことだろう。自分が死んでも、後を引き継いだ私がゼンマイ仕かけの自動人形のように計画をなしとげるのだ。すでにゼンマイはいつぱいに巻かれていた。佐藤は成功を確信していただろう。

この夜遅く、私はこっそり部屋を抜け出し、甲板に出た。晴れた明るい夜で、月が高いところにある。雲も輝き、はつきりと姿を見せている。

船べりへ行き、手すりにもたれかかった。悩んだりためらったりするかと思っていたのだが、そんなことはなかった。私はあっさりとペンダントをはずし、手すり越しに投げ捨てることができた。

小さな水しぶきを上げただけで、あとには何も残さず、佐藤の写真はインド洋の底深く沈んでいった。パンプキン号はイギリスへ向けて走り続けた。

天気がよかったので、庭で日向ぼっこをしながら、私は本を読んでいた。メイドが茶を運んできてくれた。私が顔を上げると、彼女も気づいて、にっこりした。

「お母さんは？」と私は言った。

「種を買ったために市場へ行きました。家庭菜園を広げるおつもりですよ」

「へえ」

門が開く音が聞こえてきたので、私はそちらへ顔を向けた。メイドも同じようにした。だがここからでは、植え込みが邪魔になって門のあたりは見えない。

「誰でしょう？ 奥様にしては早いようですが」

「お客さんかしらね？」

私は立ち上がり、様子を見にいった。客は門を入ってきて、ドアの前に立ってノックをしようとしていた。だが私に気づいて、持ち上げた手を途中で止めた。

「ロング」私は言った。

「おお」ロングは笑い顔を見せた。

「久しぶりね。元気だった？」

「おまえも元気そうだな」なぜかロングが照れたような顔をしていることに気がついた。ロングを居間に通し、茶と菓子を出した。

「元気そうな顔を見て、ちつとは安心したぜ」ロングは部屋の中を見回した。「中佐はどこだ？」

「出かけているの。もうすぐ帰ると思うわ。母に用なの？」

ロングはまじめな顔になった。「兄貴から面倒な仕事を頼まれちゃった」

「なんなの？」

「それがさ、本人に直接話せといわれてる」

玄関の戸が開く音が聞こえてきた。

「母だわ」私は立ち上がり、居間を出ていった。すぐに母を連れて、ロングの前に戻ってきた。母の姿を見て、ロングがため息をついたのを私は聞き逃さなかった。この日の母は、濃いブルーのドレスを着ていた。ロングは、制服姿でない母を見るのはこれが初めてだったのだろう。

母はにつこりし、腰をかがめて優雅にお辞儀をした。

「ロングさん、その節は本当にお世話になりました」

「いやいや」ロングは立ち上がった。

母は私の前を通り過ぎて、長イスの上のいつもの場所に座った。
「私に御用ですって？」母はロングを見上げた。

「ああ」ロングは腰かけた。「あんたに見てもらいたいものがあった、兄貴から預かってきた」

「なんででしょう？」

ロングはポケットから一枚の紙を取り出し、母に手渡そうとした。
「不鮮明な写真ですまんがね」

受け取ろうと手を伸ばしかけたが、母は途中でやめた。「私が見てもよいもののですか？」

「見てもらってくれと兄貴が言ってる。正体がわからなくて、手こずっているそうだ」

母は写真を受け取って眺めた。私も隣からのぞき込んだ。

ロングが言うとおり、本当に不鮮明な写真だった。ピントは合っておらず、粒子もあらい。写っているのは、夜の暗い海面のようだ。棒かパイプのようなものが、波立つ水面からぴよこんと垂直に突き出している。私には何のことやらわからなかったが、母の表情が変わったことに気がついた。

「どこで撮影されたのですか？」母が言った。

「それが何なのかわかるのかい？」

「わからなくはありません。いつどこで撮影されたのですか？」

「一昨日、戦艦オレンジが沈没した話は知ってるかい？」

「新聞で読みました」

「新聞には事故だと書かれていたが、真っ赤なウソでね。調査の結果、魚雷攻撃を受けたものとわかった」

「魚雷？」

「あんなでかい船を一発でしとめたのだから、かなりいい魚雷だよな。日本海軍の雷神一号魚雷を思い起こさせると兄貴は言ってた。どんな魚雷かオレは知らんが」

「戦艦オレンジが沈没したのはマーマレード港の沖でしょう？ 日本軍艦がいるはずはありませんよ」

「だが偶然、付近でこういう写真が撮影されていたんだ。民間人が撮影したものだが、海の真ん中で見つけて、なんだろうとシャッターを切ったそう。大ウミヘビの背中の中ゲだろうかと最初は思ったそうだがね」

「ところがそれが、鉄でできた大ウミヘビだったというわけですね」

「そうらしいや」

「そうのですか」母は長イスの背にもたれかかった。私がカップを手渡すと、茶を一口すすった。

「これについて何か知っているかい？」ロングが言った。

「ええ、お話ししましょう」カップを置いて、母は身体を起こした。
「英国にはお世話になっているから、ご恩返しです」

「ありがたいが、申しわけない気がしないでもねえな。あんたを脅迫して、むりやり協力させたのだから」

母は微笑み返した。「もうすんだことです。それよりもこの話をしましょう」

「ああ」

「十年ばかり前から、日本海軍ではいろいろと不祥事が続いていたのです。ちよつとした嵐で船は沈む。大金を出して外国から買った潜水艇の性能は期待はずれ。あぐく将校の昇進についての金銭スキヤンダルと続いては、政府内部で海軍の評価が下がってしまうのも当然でしょう。これで有事の際には本当に使い物になるのだろうかという意見までささやかればじめるほどだったのです。」

そこへあの蒸気タービンの大失敗です。このままいけば我々は冷遇^{くう}され、陸軍にますます差をつけられてしまうという危機感が海軍全体に広がりました。この計画は、そういうときに持ち上がったのです。」

はじめは酒の席での冗談だったようです。外国の名のある戦艦を撃沈してみせれば、日本政府のお偉方だって、海軍の実力を認めざるを得ません。平時^{へいじ}ですから、おおっぴらに撃沈することはできませんが、誰がやったのかばねなければよいのです。そして政府の石頭^{しかぶくろ}どもにだけ、あれは我々がしたことだと教えてやればよい。そういう計画だったのです。」

私も耳にはしていましたが、冗談だと思っていました。欧州まで出かけていって、英国海軍の戦艦を撃沈してみせるですって？ 冗談も休み休み言え、というところです。でも彼らは本気だったようですね。ひそかに船を建造し、実行に移したのでしょうか」

「具体的にはどういう計画だったんだい？」

「この船は、タルのようなずんぐりした形をしています。浮かぶでもなく沈むでもなく、クラゲのように水中をゆらゆらとただよふことができます。そうやってイギリス近海に潜み、何でもいいから戦艦が通りかかったら、魚雷をぶっ放します」

「この写真がその船だとする根拠はあるのかい？」

母は写真を指さした。

「このパイプは、よく見れば三本の細いパイプをたばねたものだとわかるでしょう？ これがエンジンの排気管。こちらが吸気管です」

「残りの一本は？」

「潜望鏡ですよ」

「あんたはよく知っているんだな、中佐」ロングはにやりとした。

母もにつこり笑った。「軍籍を離れていても、中佐と呼んでいただけるとうれしくなってしまう」

「ああ、中佐殿」

「あまりうれしがらせないでください。私も図面を見せられたのです。冗談で描かれたものと思っていたのですが」

「他に何か記憶していることはあるか？」

「二つあります。船名はマンボウでした」

「えらく奇妙な名をつけたもんだな」

「形が似ているからでしょう。もう一つ覚えているのは……」

「なんだい？」

「図面には、魚雷発射管が二つ描かれていたということです」

ロングは口をぽかんと開け、長い間身動きもしなかった。

「なんだって？」

母はにつこりした。「大型戦艦の沈没が、近いうちにマーマレード港沖でもう一回起こるだろうということですよ」

母につられたのか、ロングも唇をゆがめ、笑い顔を作った。

「しかしまた、どうしてイギリス海軍が標的なんだ？　どこの国だっつかまわないわけだろう？」

「それはやはり、蒸気タービンの件でうらみがあるからでしょうね」

「ほお」ロングはうれしそうに笑った。「だがマンボウも、日本から単独でやってきたのではあるまい？」

「もちろん母船に積まれてきたはずです」

「母船？」

「見かけはただの貨物船でしょう。船倉せんそうに積んで日本からやってきて、真夜中にクレーンを使って海に降ろしたのでしょう」

「まさか、母船の名までは知らないよな」

「ええ、そこまでは知りません」

「まいったよなあ」 ロングは天井を向いて、あごの下をぼりぼりとかいた。

「どうしたの？」 私は横から話しかけた。

ロングは私をじろりと見た。「マーマレード港は、ここから二十マイルとありやしねえ。今すぐ調査に出かけない言いわけなんか、見つかかりっこねえよなあ」

母と私は顔を見合わせた。

「よし、仕方ねえ」 ひざをポンとたたいて、ロングは立ち上がった。

「行くぞ、フィッシュ」

「えっ？」

「おまえも通訳としてついてくるんだよ。早くしな」

二十分後には、私はロングと一緒に駅で列車を待っていた。その

一時間後には、マーマレード駅に立っていた。

「おなががすいたわ」駅の建物を出ながら、私は言った。時計を見ると、もうすぐ正午だった。

「メシの話なんかするんじゃない。あとでなんか食わせてやるから」

私たちは大きな通りにそって歩き続けたが、まわりはだいぶ港らしい景色になっていた。レンガ色の大きな建物がいくつも並んでいて、倉庫街のようだ。背の高いクレーンの並んだ造船所も遠くに見えるはじめる。船員向けの食堂や酒場がある。空気に潮の匂いが混じり始める。

ロングが立ち止まったのは、二階建ての建物の前だった。いかにも役所という感じで、入口のわきには『マーマレード港税関』と書いてある。

「これはなに？」

「あん？」ロングは考えごとをしていたらしくて、ぽけつとした顔で私を振り返った。「何か言ったか？」

「ここで何をするの？」

「ああ」ロングは軽くウインクして見せた。「まあ見てなよ」

その一時間後には、私とロングはある埠頭を歩いていた。港のはずれで、ひとけのないあたりだ。岸壁が長くまっすぐに続いている。ずっと向こうに一隻の船が接岸しているのが見えていた。税関職員によると船名はウツボ丸。いまマーマレード港にいる唯一の日本船

で、もちろん貨物船だ。

私たちは税関職員の制服を着ていた。青いズボンと上着で、頭には帽子を乗せている。ロングが私を振り返った。

「どうでもいいが、おまえの制服は本当にぶかぶかだな」

私は自分の身体を眺めた。たしかにその通りだった。一番小さいサイズを貸してもらったのだが、それでも胴回りはゆるゆるだし、それでも長すぎる。ズボンのすそは、折ってたくし込んでごまかしてある。肩のところがあまりにも余っているから、丸めたタオルを入れて調節していた。

「あなただって似合ってはいないわ」

私とは逆に、ロングの制服は小さすぎた。胸が分厚すぎて、上着の一番上のボタンはとめることもできない。

「不審に思われないことを祈るだけだな」

「むりじゃない？」

「知るか」

私たちは、ウツボ丸のそばまでやってきた。立ち止まって船体を見上げた。

かなり大きな船だ。甲板の上には、背の高いクレーンが何台も突き出している。船腹には鉄製の階段が下ろされていて、地面に接している。そこに船員が一人いて、タバコを吸いながらこっちを見ていた。顔つきから見て日本人のようだ。

ロングは近寄り、その船員に向かって、さっと敬礼をした。船員はびくつとして、思わずタバコを捨てて右手を上げかけた。だが途中でやめて、ほおをぽりぽりとかいた。

「船長はいるかね？」ロングが言った。

私はそれを日本語に通訳した。「船長さんはいらっしやいますか？」

船員は目を丸くして私を見ていたが、すぐに日本語で答えた。

「いるよ。何か用かい？」

私がそれを英語に訳すと、ロングはにつこりして言った。「気にしないでくれ。この小娘は通訳だ。母親がばんくらな女で、日本から密航して来た女を乳母に雇っていた。その間、自分は遊びほうけてたんだな。そして気がついたら、イギリス人のくせに英語よりも日本語が達者というわけのわからねえ娘になっちまってた」

私がそれも通訳すると、船員はもつと驚いた顔をしたが、船長を呼ぶために階段を上がっていった。私たちは下で待っていた。船員の姿が見えなくなると、ロングがささやいた。

「あれは軍人だぞ。オレが敬礼するのを見て、とっさに敬礼を返そうとしやがった」

「日本海軍の軍人？」

「まず間違いねえな」

ウツボ丸の船長が姿を現した。鼻の下にちよびヒゲを生やした男

で、高級船員の制服を着て、つばのある帽子まできちんとかぶっていたが、服にはしわもなくてぱりっとしていた。背筋を伸ばしたまま、階段をさっさと下りてきた。

「何の御用でしょう？」私たちの前までやって来て、船長はきれいな英語で言った。

ロングが私のわき腹を軽くつついて、にやりと笑った。「これで通訳の出番はなくなっちまったな、え？」

船長は黙って待っている。

「いえね」ロングが話し始めた。「正式の立ち入り検査ではないので断っていたでもいいんですが、ちょっと船内を見せていただきたい事情ができてまして」

「なんです？」船長は無表情に見つめ返してくる。

「いやあ」ロングは笑って帽子を脱いで、頭を少しかいた。「アホみたいな話で恐縮なんです、昨日の夜中のことなんです、おたくの船の甲板に天女^{てんにょ}が舞い降りるのを見たという者がおりまして」

「なんですと？」

「天女です。背中に翼のある女神ですよ。おとぎ話に出てくるでしょう？」

「それが本船に舞い降りた？　ばかばかしいよた話ですな」

「オレもそう思うんですがね。目撃者つてのが市長で、その直接の

命令とあつては、調べるふりぐらいはしないわけにはいきませんや。やっこさん、酒ビンが人生最良の友という男ではあるんですがね。カミさんの仲もうまくいってないみたいで、欲求不満なのか、素っ裸の天女だったと言い張ってまして」

「わかりました」船長はため息をついた。「ご案内しましょう。隠すことは何もないですからな」

「すみませんねえ」

私たちは、船長のあとをついて階段を登りはじめた。あちこちさびた階段なので、私は少し恐かった。床はすけすけで、下が丸見えになっている。今にも踏みはずして、転落してしまいそうな気がする。一歩進むたびに地面が遠くなる。ロングの体重のせいで、ぎしぎしゆらゆら揺れる。

「早くしろよ」ロングが私を振り返って、いらいらしたような声を出した。

「どうしたんです？」船長も立ち止まった。

「えへへへ」ロングは笑った。「この通訳がグズで困りまさあ」

「そうですか？」船長は表情を変えずに続けた。「蒸気タービン事件のときの手ぎわは、なかなか見事でしたかな」

私とロングは口をぽかんと開けたまま、顔を見合わせていた。

船長がおかしそうに笑った。「これで、いもしない天女を探す必要はなくなっただけですな」

「フィッシュ、走れ！」ロングが勢いよく階段を駆け下りはじめた。

意味がわからず、私は一瞬遅れたが、すぐについて走りはじめた。ぐらぐらする階段を駆け下りていった。

転ばずに地面にたどりつけたときには、本当にほっとした。見上げると、船長がゆゆうと階段を登りきって、甲板に姿を消すところだった。そのあと「どうする気なんだろう」と私がつぶやくのと、階段がぐらりと揺れて大きく傾き、一瞬は我慢したが、重力に引かれてすっと落下を始めるのとはほとんど同時だった。

ロングが私の腕を乱暴に引いて、その場から離れさせようとした。階段は十メートル以上の高さから落ちてきて、私たちから何メートルも離れていないところで大きな音を立てて地面にぶつかり、石のカケラをいくつも弾き飛ばした。

「大丈夫か？」ロングが言った。

「うん」

「日本人め、乱暴なことをしやがって」ロングはいまいましたような顔をして、ウツボ丸をにらみつけた。だが突然私を振り返った。「おい、走るぞ」

「え？」

「ついてこい」

ロングに引きずられて、私は再び走り始めた。ウツボ丸を離れ、

倉庫と倉庫の間へ駆け込んだ。一ブロックほど走り続け、ある倉庫のかげまで行くと、海軍の制服を着た男が立っているのと出くわした。

「あの船で間違いねえ」はあはあ息を切らせながら、ロングが言った。

「絶対にそうか？」答えたのは、ロングの兄のウィルソンだった。

「間違いねえ。フィッシュの顔を知ってやがった」

私は大きな声を出した。「そのために私を連れてきたの？」

「おまえなんざ、そのぐらいしか使い道がねえよ」

私のふくれつつらなど無視して、ロングは兄を振り返った。「例の人はまだ来ないのかい？」

「迎えの馬車をやったから、もうすぐだろう」

馬車は十分もしないうちに現れた。からからと走ってきて、目の前に止まった。ドアが開いて、制服を着た母が降りてきた。ウィルソンは敬礼をして迎えた。背筋を伸ばして、母も敬礼を返した。

「私が話をしてきましょう」事情を聞かされ、すぐに母は言った。

「どうなさるんです？」ウィルソンが言った。

母は振り返り、そばにあるクレーンを指さした。岸壁に作りつけであり、何トンもの重さのものを持ち上げることができる背の高い

ものだ。鉄骨を組んだ塔のような形で、てっぺんに操縦室がある。

母はクレーンのハシゴに手をかけた。「私となら口をきいてくれるかもしれませんが、まかせてくれますね？」

男たちは顔を見合わせた。小さな声で「仕方ないんじゃないか、兄貴」とロングが言うのが聞こえた。ウィルソンが肩をそびやかすのも見えた。

男たちは了解したと解釈したらしい。母はハシゴを登りはじめた。いかにも船乗りらしく、身軽に上っていった。聞こえはしなかったが、口笛を吹きながらだったかもしれない。どんどん高くなっていくが、スピードをゆるめもしなかった。

母は操縦室まで行った。そこからどうするのかと試みてみると、窓を開けて身を乗り出し、ひょいとクレーンの腕に乗り移るではないか。私はひやりとしたが、母は平気な顔で、うまくバランスを取って、腕にそった狭い通路の上を歩き始めた。あつというまにクレーンの先端に行き着いてしまった。

そこからは太いロープがまっすぐに垂れ下がっている。母はそれにつかまり、サルのように降りていった。身体を揺らして反動をつけ、ウツボ丸の甲板に飛び降り、私たちからは見えなくなった。

五分たっても何も起きなかった。

「何をしてるんだろうな」

ロングが最初にしびれを切らせた。ウツボ丸が大きく汽笛を鳴らし始めたのはそのときだった。

大きな船だから、耳をつんざくようだ。短い音と長い音を組み合わせ、音はあるパターンになっている。その同じパターンを、三回、四回と繰り返す。

それがモールス信号であることに突然私は気がついた。イギリスへ来てから、モールス信号を覚えるようにと母が何度もしつこく言った理由がわかったような気がした。私は、急いで男たちをせきたてた。

「早く馬車に乗るんです。早く」

母を乗せてきた馬車は、まだそこに止まっていた。私は二人の手を引き、連れていこうとした。だが男たちはきよんとしている。

「なぜだ？」ロングが言った。

「今のはモールス信号だな。何を言ったんだ？」ウィルソンが言った。

日本語だったからわからなかったのだと、やっと私は気がついた。男たちから手を放し、馬車に駆け上がりながら言った。「われに続き、貴艦も自沈せられよ」

二人があわてて私のあとをついてきたことは言うまでもない。「早く行け。船が爆発するぞ」とウィルソンから言われて、御者までが顔色を変え、ムチを振るった。

とても大きな爆発だった。馬車はすでに数百メートル離れたところにいたが、それでも車体が大きく揺れ、窓ガラスがびりびりいい、馬は驚いてさおだちになりかけた。

現場の被害は相当なものだった。ウツボ丸は船体を引き裂かれ、沈没していた。クレーンは倒れ、倉庫も二棟ばかり崩壊した。崩壊をまぬがれた倉庫も、窓ガラスはすべて失われた。埠頭は完全な作り直しが必要になった。

数分遅れて港外でも爆発があったが、こちらの被害はたいしたことはなかった。大きな音と共に海中から水しぶきが上がり、何かがぶくぶくと沈んでいく気配があつて、それで終わりだった。

馬車に乗せられ、私はすぐに家に帰された。ウィルソンが気がつかつて、誰かを付きそわせようかと申し出てくれたが、私は断つて一人で乗った。母がもう帰つてはこないことをメイドにどう説明したものでらうと思ひながら。

古着屋へ行つて、私は黒い上着とズボンを買ってきた。顔を隠せるような深い帽子も用意した。

家に帰つて、鏡の前で身につけてみたが、男に見えるかどうかあまり自信はなかった。顔を少しすすで汚しておくことにした。

家をそつと抜け出した。メイドにも見られずにすんだ。町へ出て地下鉄に乗った。

地下鉄に乗るのは久しぶりだった。叔父と一緒に乗ったときのことを思い出さないではいられなかった。

イスに座ったまま叔父が動かなくなったあと、私は身体を探つて、強盗に見えることを期待して、持ち物を抜き取ったのだ。タービンの部品はそのとき見落としてしまったのだろう。

サイフから現金だけを抜き取り、残りはすべて地下鉄の窓から投げ捨ててしまった。叔父のポケットの中には、なにやらこまごました物がいくつも入っていたのだが、その中に茶色い皮袋に入った小さな丸いものがあつたことは覚えていた。急いでいたので、中身を確かめもせずにそれも捨ててしまったのだ。

捨てた場所がどのあたりだったのか、大体のことはわかっていた。あの日以来、私は地下鉄には乗っていないのだった。

ある駅で、私は地下鉄を降りた。叔父を殺した日に降りたのと同じ駅だ。

狭いプラットホームは人であふれている。天井は丸く、発車していったばかりの列車の残した煙がまだただよっている。人ごみをかき分けて、私は歩き始めた。

プラットホームのはしまでやってきた。幸いここは出入口から遠く、人は少なかった。まわりを見回し、誰も見ていないことを確かめて、私はさつと線路に下りることができた。

すぐにトンネルの中へ向けて駆け出す。私の姿は、一瞬で暗闇の中へ消えてしまったに違いない。

トンネルの中は暗く、駅よりももっと狭かった。本当に列車ぎりの幅しかない。作業員が列車をよけるための小さな横穴が、ところどころ作つてある。歩きながら耳をすませ、私は二度横穴に入つて列車をやり過ごした。

そのたびに大きな車輪の音と振動に身体全体をゆすぶられ、濃い煙と蒸気を吸い込まされた。目まで痛くなってきた。それでも私は、目的の場所につくことができた。

さつきの駅からは一キロぐらいだったと思う。そこに駅の廃墟があったのだ。私は携帯用のランプを持っていて、列車が通るたびにフタを閉めて光が漏れないようにしていたのだが、ここへ来て高がかげ、まわりを照らしてみた。

ここは廃止になった駅だった。ロンドンの地下鉄は新しい路線がどんどん建設され、線路も頻繁^{ひんぱん}につけ変わっていた。だから中にはもう使われなくなって廃止される駅も出てくるわけだった。これもそつという廃駅の一つだった。

叔父のポケットから取り出したものを窓から投げ捨てたとき、列車がちょうど廃駅を通過するところだったことを私は覚えていた。その後さっきの駅で下車したのだから、ここがその廃駅に違いなかった。

古い時代の駅なので、大きなものではない。プラットホームもちやちで、短い列車しか停車できなかっただろう。私はため息をつき、どういつ投げ捨て方をしたのだったか、思い出そうとした。

突然列車の音が聞こえ、ヘッドライトが近づいてきたので、私は柱の影に隠れた。ごうごうと音を立てながら、列車が通過していった。客車の車内は明るく照明されている。列車が行ってしまってから、私は足元を探し始めた。

私ที่บ้านに帰ってきたのは、夕方近くだった。体中が真っ黒に汚れているのを見て、メイドはひどく驚いていた。すぐに風呂に入り、身体を洗った。

ひどく疲れてはいたが、嫌な気分ではなかった。無駄な一日ではなかったからだ。化粧台の上には、廃駅で見つけたものが置かれていた。

「そりゃあねえよ」次の日、家に呼びつけて用件を聞かせると、珍しくもロングは弱気な声を出した。

「どうして？」

「親父だけは勘弁してくれ。オレは頭が上がらねえんだ。もし怒らせでもして、相続人名簿から外されたらどうしてくれる？」

「何言ってるのよ。カリバー一族はもうすべて死に絶えたと知っていたくせに、『フィリップの娘がまだ日本で生きていることを密告してやる』と言って母を脅迫したのはあんたよ」

「あのときは仕方がなかったんだ。オレを相続人から外すと親父がおどすもんだから……」

「言うことをきかないと、本当に相続できないようにしてやるからね。さあ、早く私をお父さんのところへ連れていきなさい」

ロングはしぶしぶ承知した。飼い主にけとばされた犬のような顔をしているのがおかしかった。その日の昼過ぎには、私たちは海軍省の庁舎にいて、応接室のようなところへ通され、海軍大臣が姿を見せるのを待っていた。

ロングは私の隣に座って、背中を丸めて小さくなっている。ドアが開いて、とうとう大臣が入ってくると、ロングはぴくりと飛び上がった。

大臣は、想像していた人物とはまるで違っていた。ウィルソンの父でもあるわけだが、特に似ているとも思えず、むしろロングが父親似なのだろう。ロングを小柄にし、顔にしわを増やし、頭をはげさせたような感じた。口ひげは同じように濃い。

海軍大臣ヘンリー・ロングは私を見て、「やあやあやあ」と甲高い声であいさつをした。大臣という言葉が持つ堅苦しいところはまったくなく、どこかの農園の気楽な経営者ともいう感じた。それでも制服は着ているが、私とロングに向かい合って、気楽にちゃんと腰かけた。

「若いお嬢さんをお迎えすることなどめったにないので、ときどきするよ。それと、そこでしかめっ面をしているのは、わが息子のようだな」

ロングはちらりと顔を上げ、片手を振った。

ヘンリーはうれしそうに笑った。「相変わらず愛想のいいやつだわい。それで冬子さん、何の御用でしょう。私でどうお役に立てましょう?」

私はポケットに手を入れ、ハンカチに包んだ小さな物を取り出した。テーブルの上に置き、ゆっくりと広げてみせた。窓から差し込む光を反射して、石はきらりと輝いた。

「これは?」ヘンリーはひどく驚いた様子だった。ロングも口をぽかんと開けている。

「カリバー一族の紫ダイヤです」私は答えた。「ある場所で見つけました。叔父は、換金するつもりでこの国へ持ち込んだでしょう」

「なるほど」ヘンリーはため息をついた。ロングは言葉もないようだった。

「それで、何のためにそれを私にお見せになるのです?」再びヘンリーが言った。

私はにっこりと微笑みかけた。

「これを国王陛下に献上けんじょうしたいのです」

「しかしそれは、値をつけることができぬほどのものですよ」

「国家の所有物として博物館かどこにおさめてもらえれば、二度とあなた方をわずらわせることはないでしょう」

ヘンリーは不思議そうに私を見つめた。「失礼な言い方かもしれないが、あなたはとてもすっきりした顔をしておられるように見えるが」

「ええ。文字通り暗闇を抜け出し、光の中へ戻ってきたような気分です。本当に長い暗闇でした。ホコリとススだらけの場所で、ときどきゴウゴウという音が聞こえる他は何もわかりませんでした。今から考えれば、あれは地下鉄の音だったのですね」

「地下鉄？」

「その前には冬子の叔父のポケットの中にいました。その前は鉄でできた金庫の中。何世紀にもわたって、血にまみれた手から手へ奪い取られたことが何度あったことが」

「何の話をなさっているのです？」

「私自身の話ですよ。それはそうとロング大尉」

ヘンリーと顔を見合わせていたが、ロングはびくんとして振り向いた。「なんだ？」

「この娘は、いつかあなたのことを好きになるような気がします。結婚してやれば、よい妻となるでしょう」

「なんだって？」

冬子は微笑んだ。「私はもう、人の手から手へ、暗闇から暗闇へと渡っていくことに疲れてしまいました。どこかにひっそりと落ち着きたいのです」

「だからイギリス国王陛下に献上されたいと？」ヘンリーは言った。

「そうです。何世紀にも渡り、私には様々な不幸が付きまとってきました。私をめぐって、何人が命を落としたか知れません。でも国家の所有物となれば、その悪運も終わりを告げましょう」

「あなたは、なぜ青野一族に復讐しようとしたのです？」

「何世紀にもわたって、カリバー一族は私の正当な所有者でした。私にも奇妙な忠誠心のようなものがなかったわけではないのです」

「ふん」ロングはいかにも気に入らない声を出した。「おまえんぞを所有して、この国が滅びたりしなきゃいいがな」

「それは、あなたのように立派な方がいれば大丈夫なのではありませんか？」

「こいつめ、石ころのくせに人間様に向かって皮肉を言いやがる」

「私のような目にあえば、それぐらい言いたくなりましょう。では大臣閣下、献上の件はご承知いただけたと思つてよろしいですね？」

ヘンリーはため息をついた。「ええ、陛下にお話ししてみましよう。細かいいきさつは伏せてですが、きっと承知してくださるでし

よう」

ロングの表情が変わった。「それはそうとフィッシュ。おまえ、タービン事件の報酬をまだオレに払ってないぞ。今すぐ耳をそろえて……」

だがロングの言葉は、途中で途切れてしまった。ヘンリーが片手を上げて制していた。

「ジョン、見るんだ」

「何です？」

冬子は目を閉じてしまっていた。長イスの背に寄りかかってうたた寝をしながら、楽しい夢でも見ているような表情だ。そしてその微笑が途切れ、一瞬まゆにしわを寄せ、はっと目を覚ました。驚いたような顔で二人の男を見つめ、部屋の中を見回した。自分がいる場所にはじめて気がついたという表情だ。

冬子が口を開き、何かを言ったが、ヘンリーにもロングにも理解できない言葉だった。男たちは顔を見合わせた。また冬子がかを口にした。やはり理解できない外国語だ。それでも冬子は微笑み、機嫌よさそうに二人を交互に眺めている。

「父ちゃん、これはどういうことだい？」ロングが言った。

ヘンリーは、ほっと納得したような顔をしていた。息子のほうを向き、口を開いた。

「ジョン、日本語の通訳を呼んでくるんだ。当分必要だろう」

ロングは立ち上がった。ドアが開く音を聞きながら、ヘンリーは

宝石に手を伸ばし、そつとハンカチに包んでポケットの中に入れた。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1387d/>

冬子と密輸団

2011年11月11日15時55分発行